

特234  
818

報德講義集  
一



始



特234  
818

自昭和八年一月  
至同六月



講話集



帝塚山報德會

はしがき

帝塚山報徳會は、昭和三年の初め、花田仲之助先生の御勧めに依り設立せられ、爾來年と共に隆昌に赴き、本年をもつて既に滿五週年となれり。毎月例會席上の有益なる講話のかずくをひと、きの聞捨てにするは、なんぼうおしき事ぞと考へ、本年一月より六月迄の例會講話の筆記を、小冊子として會員諸賢に頒付すること、なせり。更らに報徳精神涵養の資とならば、如何ばかりうれしきことぞと云爾。

昭和八年六月

目次

吉川頼易先生	昭和八年一月十日	(一)
橋本常彦先生	昭和八年二月十日	(一八)
山崎和宏先生	昭和八年三月十日	(二五)
角谷源之助先生	昭和八年四月十日	(三七)
猪谷不美男先生	昭和八年五月十日	(四九)
藤田武二先生	昭和八年六月十日	(六六)
帝塚山報徳會決議事項		(七四)

官幣大社生國魂神社宮司

吉川 頼 易 大 人

私は豫て御目にかゝりましたので、御承知の事と存じます。此度新しい年をお迎へになり、報徳會も一ツ年をお取りになりましたと共に益々堅實に益々御發展爲さいます事を謹んでお祝ひ申し上げます。昨冬蒲田さんに御目にかゝりました際に、今日茲に出て何か話をせよといふ事でありましたので、只うか〜とお受けを致しましたが、實は後から考へて見ますとこちらへ参りますのが三度目であります。

昔から佛の顔も三度と言ふ事がありますが、佛様でも三度見ると餘り嬉くないのであります、夫に私のやうな者が茲に立つて何等の経験も考へもない、只朝晩神様にのみ御仕へ申して此歳を重ねて参りまして、自分の子供までもお父さんは堅苦しいので困るといふ様な小言を受けて居ります者が、お正月早々此處で堅苦しい御話を申し上げます事は御辭退申上げた方が良かったと思ひましたが、而しながら一旦お引受け致しましたので、假令

あなた方に憎まれても仕方がない、何か一ツ聞ひて頂かふと思つて参つたのでありますが、何か御参考になる御話を致さねばならぬと思ひながら、ツイ彼是と用事が重りまして考へる時間がなく今日になりまして、餘り有益なる御話も出来ないでありますからどうか其御積りで暫くの間御静聽を御願申上げます。

只今御讀み上げになりました當報徳會の實行決議を拜聽致しました處が、何れも皆大切な事柄で、誠に私は結構な事と考へて居ります、而も其數が五十五であつたかと思ひますが、又一つ今晚殖えたやうであります、私共考へまするのにアノ項の中何れか一つ確實に御實行が出来ましたならば、残りの五十四は自然にやつて行く事が出来ると思ふのであります、自ら悪いといふ事を心の中に感じて、其惡ひ處を打捨て、しまつて改める事が一つ出来ましたならば、凡てに改める事が出来る事と信するのであります。

私も本年は丁度六十四才になりますが、此六十四年間を回顧致しますると大體世の中の事は一巡り卒業致しました様な感じが起りますが、此間世の有様を詠んだ腰折があるのでありますそれは

世の中は良しと惡しとをこきまぜて

昔を今に繰り返しつゝ

といふのであります、私は昔の歴史を考へ國の盛衰を考へ、夫から人の家の盛衰を考へ自らの身體に就て考へて見ますると、世の中の事は昔から良い事と惡ひ事とをこきまぜて今日夫をくり返して居るのであります、故によく善惡を考へまして惡しきにふれず良ろしき方へよる様にせねばなりません、夫で私は次の様な腰折を詠んだのであります。

良し惡しのちまたに立てる道しるべ

心して行け人の正道

就きましては其良し惡しの撰び方であり、此間も或る新聞記者が参りまして其話を致しました所が、其記者の云ふには良し惡しくと云はれますが一體其良し惡しの區別は昔から習慣附けられたもので本來一定したものでなく、時代に依つて變化し地方に依つて變るもので、假令ば東洋に於ては昔から男尊女卑といひ西洋では女尊男卑と言ふ様に全く正反對になつて居つてどちらが良いか惡いか判らぬではないか、是らは全く習慣づけられたものである、だから本當に良い惡いといふ事は分らないと言はれたのであります、夫で私は其様な六ヶ敷事は知らぬが兎に角世の中の状態として、少い物は貴重な物、多い物は貴重でない物と言ふ事になるので、亞米利加の様な新開地であつて男が多く渡つて行つて女が少なかつたが故に夫で女を大切な貴重な物といふ事に成たのぢやないか、東洋の様

早くから開けて男女の數に大差ない所では天然自然の良否がはつきりして人類として同等の男女の間にも、天と地との別ある様に區別がはつきりしてあるのではなからふか、全體君は良い事と悪い事とを知らないで此世の中に生活して居られるのか、私は簡單に良い事と悪い事とをいふて見やう、人が厭がる事、人に迷惑を感ぜしめる事、人に損害を掛ける事などを行ふ事が悪であり、人が喜ぶ事、人が楽しく思ふ事、人に利益を與ふる事を行ふ事が良い事であると思ふが、どふであるかと申しました所が、成程夫は能く判つて居ると云はれた事であります。

私共祖先代々いろ／＼の神様を御祭申して信仰して參つて居りますのは、結局神々様の御守りに依りまして悪しき心を起さぬ様にして、人に危害を加えぬ、人に損害を與えぬ人の爲に良い事をするといふ様に修養する爲に、神様を御祭するのでありますから、其考へで神様を信仰せねばなりません、世の中といふものは本居宜長先生の詠まれました如く  
 良き事に禍事あつき禍事に良き事あつく世の中の道

と言ふ様に良いと思つてゐると悪い事悪いと思つてゐると良い事が起つて來るといふ譯で私共が崇敬致してゐます伊邪那岐大神様が夜見國へ行かれました時に、非常に汚れを御受けあそばされました、大禍津日神、八十禍津日神がお生れになつたので其禍を直さふとな

されました、大直日神、神直日神をお生み遊ばされて居ります、御互は此直なる物と曲つた物とを以て居るのでありますから、豫て此處で申し上げました様に、其曲つた物を身體の中から拂ひ除ける事を修養する事が必要であります、其修養はどうすればよいかと申しまするに、先づ心と身體を清淨に致すのであります、湯水を以て身體を洗い清め心を直く正しく明るくするのであります、私共神様に御仕へ致して居ります者は、其行事が最も大切なものゝ一つであります、其行事の一端を申し上げますと、今御祭の規定では、中祭以上の御祭を務めまするには前日から潔齋といふ事を致します、潔濟と云ふと前日から湯水を以て身體の垢や汚れを洗ひ落して、食物にも充分注意致し、神社の潔濟所又は社務所に泊りまして翌日湯水を浴びて、祭典に奉仕するのであります、昔は三十日間も潔濟して神祭りを勤めたのであります、私が長崎の諏訪神社に奉仕、して居りました時は、御祭一週間前から潔濟を致しましたので其經驗を味はつたのであります、それは一室に閉ぢ籠りまして、宮司潔濟につき面會謝絶といふ札を掛けてまして外出は致しません、食物も神社で煮たものゝ外は一切食べず、食べ残りの物は地へ埋めるなり川へ流すなりして何人も之を同食する事を免さないのであります、禰宜主典は五日前から潔濟致しまして、世の中の精神上の汚れを受けぬ様にして、初めて神様の御祭に奉仕致したのであります、此清潔な

る身體と明らけき清き直き正しき心とを以ちまして、恐れ多くも 天皇陛下の御命令に依る御祭を致しまする時に、其精神が神様に感應致しまして祈願なるものが徹底して一般國民の幸福となつて表はれるものと存じます、此様な潔濟は諏訪神社の特例でありまして現今の規定に依ります各神社の潔濟は先に申上げました前日潔濟であります、其上神社經費の都合に依りまして、祭典當日の晴雨を氣遣ひ參拜者の多寡を心配せねばならない事は國家の崇祀として實に遺憾の事と存じます。

以上申上げました潔濟は神職の心身を清淨に致しまする行事の一端であります、兎も角も此世の中に立つて仕事をし成效するのは直き正しき心を養ふ事が最も大切な事と存じます。

苦しきも楽しき事も皆己が

まきにし種の芽ばへなりけり

苦しみの後は楽しく樂しみの

あとは苦しき物とこそ知れ

という様な事を詠んで見たのでありますが、世の中の事は眞心を以て働かしまして人に害を加へなかつたなれば、如何なる事でも成功せぬ事はなく發達せぬ事はないのであります、

是に反して人に損害を與へ人に苦痛を感ぜしめるやうな事がありましたならば、如何なる事も不成功に終り發達は出來ないのであります、私は世の中の出來事を靜に考へまするのに或家に不時の災難があり、或家は非常な幸福があると云ふ事は、必ず其由て來る原因がある事を認める實例が澤山あるのであります、此大阪市内でも或る立派な商店でありまして永らく市民の御最眞に預つて參つて居りながら、店仕舞の名の下に安い品を買ひ集めて是れを賣り出し、佳い品は他へ持出して店仕舞したものが終には思はぬ災難に罹つたと云ふ様な實例は少なくないのであります、又田舎の息子が東京へ出て學問をする内に、女に關係などして日々田や畑を耕して苦勞して居る親を欺いて、金子を出さしめて一時快樂をしたために終に不治の病に罹つて苦痛に苦痛を嘗めて死亡した様な事實も亦少なくないのであります、此の様な事は所謂神様の定め給ひました自然の眞理でありまして、人の力では動かす事の出來ないものであります、故に私共が今日行ひまする事柄の良し惡しは其儘後日に現れずにはおかない物でありまして、早くは自己の代遅くは子孫の代に於て實現する事は免れませぬから、肉血を分け靈魂を分けた子孫と祖先の家名を大切と思へば無理な事は爲ない様に心掛けねばなりません、然し如何に良し惡しを知り是を口に致しましても實行する事は六ヶ敷ものであります私も

子を負へる人を見ながら席ひとつ

ゆづりかねたるうたて世の中

と詠んだ事がありますが、うつかりすると電車の中で忘れる様な事がありますから時には心の中で此歌を思ひ出して、恥しい思ひを致しまして直に席を譲る事に致して居ります、一度此處で御決議なさいました事を御實行なさらない時は、自を欺く事になるのでありますから、常に實行要目を心に放さない様になさいまして御實行あらむ事を願ひます、只今の御話の様に此處に居られる御婦人の方には腫れ物を觸るやうに氣がねをして物をいはねば、此次から來て下さらぬと困るからといふ様な事ではどうも心細い次第であります、一度此處へ御出で下されば決議事項を御實行なさいまして、モウ次からは御出でにならぬとも良いという處まで徹底して頂きたいのであります、何事を實行致しまするにも目に見えない神様が見ておられるといふ觀念さへ持つて居れば出來ない事はないのであります。私は今時計の御話を聞いてヒヤ／＼して居りますが、夫は私の御宮の社務所の時計が殆どあつて居らないので何度小言をいふか分りませんが、私の宅の時計や私の持つて居る時計は何時でもキチンとあつて居る、其時計は良い店で上等の物を買つたのではなく安い古物を買つて來たのであります、心の使い様で時計は正確になるものでありますから、せめ

て時計位には自分のいふ事を聞かさなければゆかねではないかと言ふて居ります。

次に神信仰の變りました事と世の變りについて申上げます。

本日は大和へ参りました石見と云ふ驛から電車に乗らふとして待つて居りますと、杖をついたお爺さんが來られ私と二人電車を待つて居りましたが、その所に伊勢参り貳圓〇八錢と言ふ廣告が出て居りましたのを見て其お爺さんが言はれまするには、あゝ世の中は結構な事となりました、昔なれば伊勢参宮と言へば大抵此邊なれば草鞋脚絆で一生懸命に歩いて三日か四日掛で漸くお伊勢さんの土地を踏んだものであります、其時の心持は實に何とも言へぬもので本當に眞心をこめて拜み奉つたのであります、今日の様に朝出て夕に歸るといふ便利な事になりましたが故に、それ丈け参る人が多くなつて参りましたが、是は全く敬神の念が深くなつたのではなく、一寸閑があるから伊勢まで行つて來やう位で伊勢見物位に出掛るものが出來るのであります、ア、いふ電車とかいふものが出來る事が良いか悪いかと言ふ様な事が考へられます、昔なら村の者が伊勢へ御参りして歸ると言へば村中の者が村の端までお迎へをして先づ第一に氏神様へ御参りして御禮を申し夫から我家へ歸りますれば村中の者が其家へ出向ひて御祝を申し村中の家々へ御札をお配りするといふ事になつてゐまして、伊勢参宮に依つて本當に敬神思想を深めた事が大きか



つたのであります、是でこそ眞の伊勢參宮ぢやつたと思ひます、最近の様に交通機關が出来て多くの人が參る裏には敬神思想と言ふものが薄くはならぬかと思ひますといはれました、それについて一寸申し上げますが、是は誠に畏れ多い事でありますが昨年の秋に大元帥陛下が大阪へ御越し遊ばされました時私の奉仕さして頂いて居る生國魂神社へ凡ゆる方面の七十九團體の人々が祈願に御出でになりましたが、是は誠に結構な事で一天萬乗の大君の御身を、眞心から心配し奉られた事と存じますが、併し御平安御無事に御還幸あらせ給ひました後、御禮に御參拜になりましたのは二十幾團體でありまして、殘の五十何團體は御祈願の掛けつばなしてあります、是は現代人の敬神思想の何れにあるかを知る標準かと存じます。

次に農村の事について少し申し上げます。

此頃は田舎へ行つて見ましても非常に發達致しまして、お百姓さんが人造肥料とか言ひまして、白ひ粉を作物の上へバラ／＼撒いて走つて居ます、夫で高ひ金を拂つて居られる事ですが、此様な肥料を使つて居れば、今年一圓の肥を使へば來年は一圓五十錢、其翌年は二圓使はぬば利き目がないと言ふ風になつてまいりまして、夫が爲に、結局はつまらぬ／＼といつて居られますが、その娘さんを見ますと平素に銘仙の着物を着たり絹張りの日

傘をさしたりしてゐます、成程農村の行詰つてまいるのはさういふ風になつて居る計りではなく、何をするにも電氣力を以て機械でやる様になりました、殆んど機械代すら拂ふ事が出来ない有様となつて居ります、只今は自力更生／＼と政府では勸めて居られますが最早自力更生する餘力を失つて如何ともする事が出来ぬから政府の保護を頼んで居るのじやと言ふて居ります、考へて御覽なさい、赤ん坊でも獨りで立つ力を出さなければ幾歳になつても寢て計り居ねばならぬのですが、獨りで立たふ／＼と氣張りますから、這ふ様になり終に立ち立てば倒れぬ様に頑張て獨り歩きをする、是が自力更生であります、若しも赤ちやんに此力がなかつたならば二十才になつても寢て居ませう(笑聲起る)百姓が更生する力を失つて、自ら食ふ事の出来ぬやうになつたのは誰がしたのか、重い鋤鍬を振り上げたり汚い肥しに觸れる事がイヤぢやと云つて、金肥を費つて祖先傳來の良き方法を顧みぬやうになつた自業自得の結果ではありませんまいか、夫を國家の國費を以て保護して行ふといつても其保護した失費を誰か償ふか、國家から保護する爲に各方面に補助して皆が寄つてたかつて食て仕舞たなら、其結果は如何なると言ふ事を考へなければなりません、皆が自覺して他の力を借らずに自力更生せなかつたなれば、國が倒れるより外はないのであります。

次に御正月の事について少し申上げて御参考に致します。

私共の子供の時の御正月には前日大朔から神棚や祖先の靈壇を御祭りして御鏡餅を御供へし、先づ一日には夜の明けぬ内に起きて皆揃つて氏神様へ参拜し神棚には御光を上げ、お雑煮を祝ひ、東が白んで夜の明けるのを待つて七十戸あまりある各戸に就てお禮を申しますといつて一軒つゝ内へ這入て年詞を述べ、お目出たう又今年も宜しくと、お互に之を繰返して一年の始の行事を行つたものであります、それに此頃の無精な事はどうでせう、時によると三十日か三十一日にモウチャント年賀状が舞込んでゐます(笑聲起る)大概門口はビシャンとべ切て軒端に名刺受をポイと擲り出して自分は炬燵の中から首でも出して寝ころんで居つて、お前序に名刺を一つ抛り込んで置いて呉れんかといふ調子であります、二日目には田舎では朝早く鋤や鍬を持って田や畑へ行き、土を一鍬打ち返して昨年の御禮と今年の豊作とを祈り、一枚くゝ之を繰返して感謝の意を述べたのであります、今年も年賀状が殖へて遞信省は好成绩だつたといひ、今年も人出が多かつたので鐵道省は喜んでゐるとか言ふて居りますが、肝腎の此日本の美風といふものが段々無くなつて行きつゝありますのは實に慨はしい次第であります。

次は此間或る雑誌に書いてあつた事に依つて心附きましに現代の世想について少し申上

げたいのであります。

或る心あるアメリカ人が、日本へ來て其見聞した事を申しますには、今日日本で騒ぎ立てゝ居るテニスや野球カフェーなどはアメリカに於て是を押へ様として全力を盡して居るのに、日本の爲政者や心有る人々は是を如何に見て居るか、實に情ない事であると言ふたと書いてありました、實に心すべき事であり、篤と考へて御覽なさい、あの競技だとか競馬だとかが初まりました、是をラジオで放送されました時などは、到る所に自轉車を抛ちやり荷車を捨て置いて黒山の様に立ち並んで貴重な時間を空費して居るのであります又カフェーの如きも至る所に殖えて参りました怪しげなる女給の誘惑に罹りまして、有爲の青年學生の前途を誤らしめる事が少くないのであります、馬匹改良とか何とか言ふて競馬が盛になりました、馬を走らして勝負をして居りますが、其馬に馬券を賣買して賭を行ひまして内へ歸つて嫁さんに叱られて居る人があるやうであります、こんな馬鹿げた事はありますまい、そうかと思ふと競技の選手としては外國へ行くとか水泳に行くとか言つて澤山の費用をかけて出掛けて参りました一人や二人が勝つたと言つて、どれ位の名譽になるので有ましようか、日本國民として大に目醒めなければならぬ事と存じます。

次に御婦人に考へて頂きたい事があります。

此間新聞紙上で御覽になりました或る博士の令嬢が結婚の晩に氣に入らぬ事があつたと  
言ふてバツと御尻をかまして出て行つたと言ふ事でありませぬ、しかも是が結婚式は神前で  
行はれた様であります、何處の御宮でも同じ事と存じますが、一生の間睦まじく心を一  
にし苦樂を共にして友白髪の末まで立榮え行きます様神に祈願を致し、其上新夫新婦は一  
身を捧げて一心同體となり如何なる苦痛も如何なる快樂も相共にせん事を誓ひあふ事に依  
つて成立せしめた夫婦が、そういふ事に依つて破婚されると言ふ様では、行末夫婦といふ  
關係は實に心細く頼み甲斐ない事になりはせぬかと思ふのであります、夫婦關係と言ふも  
のは昔から不思議の御縁と申しまして、神様の御力によつて結ばれるものであります、  
そう容易に寄り合ひ離れ合ふものではないのであります、此和合結合の力によつて家を相  
續し、一家を健全に創立して子孫を養育し家名を繼承して參るのでありますから、我儘  
氣儘な心を起さずに結婚につきましては大ひに御考へ下さらむ事を御願申します。

御承知の様に昔の婦人は十五才位になれば御嫁入をされまして、今の女學校卒業の十八  
九才には既に子の一人や二人産んで立派とは參りませぬが、一角のお嫁さんでありました  
が今はそうは參りませぬ、學校出たての娘さんを貰つて嫁さんなどと思つたら大間違であ  
ります、皆々がそうだとはいはせぬが、學校で習ふ事は課目が非常に多いために家庭の

嫁としてはまだ、足りない所が多いのであります、私も本年卒業さして頂く娘を以て居  
りますが嫁として貰つてもらひますには、是から家庭に於て家庭學を實習せしむる事に充  
分な力を注かねばならぬと思つて居ります、考へて御覽なさい學校／＼といつても體育を  
養ふと云つて、今日はベースボール明日はテニスだと、大きいシャモジの様な物を持つて  
飛び上つたり、遠足だといつて彼地此地へ遊び歩いたりして居るのでありますから、家  
庭でジツとして洗濯物をしたり針仕事をさせても満足に仕上げるまでには出來て居りませ  
ん、悪くすると足袋などは洗濯などせずとも、デパートへ行つたら二足二十錢で買った方  
が新しいのがはけるといふ調子になりまして、夫婦連立つて百貨店や活動寫眞などへ出歩  
き、仕舞には大事な子供を生むのが五月蠅くなるのであります、デパートなどでよく見受  
けますが、奥様が意氣揚々とし化粧品や呉服物のある所を御歩きになる後から旦那さんが  
ぼんやりと附て御歩きなつて居られますが、ヨーマアあんな事をして御出なさると思ふ事  
があります、さうしないといふと御氣に召さないようであります、先程の御話に此處の御  
婦人方でも、餘程氣嫌ねをしないと次回の會に來て下さらぬと承りましたが、私は蒲田さ  
んに左様な事を爲らないともつとビシ／＼おやりなさいと云つて置ふと思ふてゐます

此身體は悪い方へ向はさぬと言ふ事を始終考へなければ、禍津日といふ魔がさすのであ

ります、夫を打ち防いで直き正しいものになる事を修養せねばなりません。御婦人が身體を飾る爲に、良い着物を無理をしても着るといふ考がそもそも魔がさしてゐるのであります、所が娘さんは賣り物でありますから飾る必要もありません、一旦夫が出来た上はソ一着飾らねばならぬ必要はありません、何事でも神様に感謝していらぬ事に心を苦しめる事はなく、直き正しい誠心を持つて、只樂をしたい甘い物をたべたい良い物を着たいといふやうな考を取除いて、どんな物でも満足致しましたならば、心も身體も丈夫になつて、快く楽しく一生懸命に働く事が出来まして家は益々榮えて參るのであります。

是から私の本職の方面の事について少し御話を申し上げまして御免を蒙る事に致します。私共が神様の御前で奏上致します祝詞の中に赤き清き直き正しき誠心といふ事があります、夫は大直日神様の精神的の御働きでありまして、此赤き心澄み明かなるもの、正しいもの、直なるものであつたなら、其内に掛引といふもの偽といふものは一切ないのであります、是と反對に大禍津日神様の肉體的となりますと腹の惡ひ濁つたもの横さまなものとなるのであります、人としては此直と禍との眞中を踏みたがへすに辿つて行く事が人たるの道であると思ふのであります、故に心を正しく致しまして修養を怠らず、神様の御力におすがり致し、曲つた心汚れたものを穢ひ除けまして、腹の中を掃除致し世の中の事々に感謝して、活き／＼した心を持つて居りましたならば、病氣などに罹る事なく達者であります、是と反對に腹の中を掃除せず世の中の事々に感謝せず不平満々と致して居りましたならば、病氣に犯されましてやれ神経衰弱ぢやとか胃病ぢやとかで苦まねばならぬのであります、此活々とした生活が神道に所謂高天原でありまして、苦しい生活が夜見國と申すのであります。

以上申し上げました如く總て世の中の事は播く種の收穫でありまして、良い種を播く家は立榮え、惡ひ種を播く家は衰へて參る事は鏡にかけて見る様で少しの間違はありません、無理に財産を殖して社界奉仕もせぬ様な人は子供が生れず種切となつてあたら財産を他人に譲らねばならぬ様になつたり、兄弟が先祖の財産を争ふて無理に取分けた弟に子が出来ず終に兄の子に相續させねばならぬ様な事になつたり、商人が御客を大切と思はず己の利益ばかりを計つて不時の災に罹つたりした實例は私一代の内に數限りもなく見聞して參つたのであります、是は全く目に見えぬ神様の御心でありまして實に恐れねばならぬ事と存じます。

今夕は取り纏つた御話も出来ませんのに御静聴下さいました事を深く厚く感謝致します

(昭和八年一月十日御講話)

## 報徳會總務所幹事

橋本常彦先生

一八

只今御紹介を頂きました橋本であります、お聞きの通りにやつと昨年の七月報徳會に入られてお貰ひしました極めて新米で御座います、報徳會の方から申しましたなれば皆さんの方が古い先輩でいらつしやいます、次に御當會のお進みになつた御様子は豫て承つて居りまして、いつかかう云ふ御會合の時に出席致しまして御一緒に會を開きたいと思つて居りました所が圖らず今回ふ事になりました、實は前刻の實行問題の御協議には非常に敬服致しましたのみならず、私も非常に啓發致されました、又一部の方からは玄米の御飯のお話も出ましたが非常に是も結構な事と思ひます、既に雑誌等で御承知でせうが、花田先生は七十三才でいらつしやいますが、確か極近年になりました七十過ぎられましてから玄米飯をお始めになりましたと通されて居りますが、桃山に報徳會が經營して居る報徳學校と云ふのがありますが、その方も昨年から花田先生の御趣旨の下に玄米食を致して居

りますが、先生が學校へ見えて其玄米飯を御あがりになりして、かう云ふ炊き方ではもう一つ味が悪いからして、御自分の宅に居られた事のある女中さんで玄米食を實際に擔當して居つた女の人を寄越してやらうと仰有つて、鹿兒島からはるく女の人が見えまして學校で三日間教へて頂きました、報徳會の幹事をして居ります家内等も一緒に指導をお受けしたと云ふやうな事でありました。

所でこの人間は慾の塊だと申します、あゝしたい、かうしたいと云ふ色々な慾でもう一杯になつて居ります、慾に手足の付たものが人間だと云ふやうな事を申す人もあります、その慾は天然自然に起るものですが天然にまかして置くと吾々はどうしても道徳に行く事が出来ません、どうしても總ての慾を一遍開放さねばならぬ、食べたいと云ふ心持を一遍開放す、そうしたその慾の本當の意義を考へて食べたいと云ふ慾に對しては食物と云ふものがあります、是は一體どう云ふ意義のあるものか、それは共通のものがある筈であります、その本當の意義に叶ふやうに食慾を満足させますればそれが道徳であります、又着物を着たいと云ふ慾があります、それに對して着物がある、着物の意義如何？ 着物と云ふものは吾々の體に纏つて居つて暑さ寒さに對して體を保護する、もう一面には吾々の品位を保つ、又外から怪我する事を防ぐ、この三つの意義しか無いのです、その意義に叶ふや

一九

うに着て居れば道徳であります。只もう體裁を飾らうとか、この間あれを着たから同じ着物では悪いとか、そんな風に正當の意義を缺いてそんな意義に使ふから不道徳と云ふ事になります、御同前の慾をよく調べてそれが意義に叶ふやうに取扱つて行けばそれが道徳であります、實際それが今日のやうな場合に處する事にもならうと思ふのであります。

吾々は甚だ不束な者であります、自分が是迄或る慾に浸つて居つたのが近年に至つてそれを裂き捨て、しまつた事があるので、私も子供の時に小學校で讀本を習つてその中に酒と煙草は養生に害ありと云ふ文句がありました、小さい時に先生に教へられてさう思つてゐましたから、酒も飲まず煙草も喫まず大きくなりましたが三十五才の時始めて煙草を喫み出した所が非常に進歩が早かつた、それからどん／＼喫むやうになりましたもう近年では、最初は巻煙草ばかりであつたのがその後は刻みも使つて兩方にしてゐました、さうするとかうなつてゐたんです、眼が明いて居る時には夜分寢んで居る時でも途中起きた時には必ず左の手は煙管を持つて居る、ついでは喫み／＼やつてゐて學校に居りましても何か纏つた考へをせねばならぬと云ふと巻煙草を唾へてやつて居つたんです、所がそれをどうして止めたかと云ふと昨年一月十九日から止めました。その前に一月十三日から五日間に亘つて讀賣新聞の知識欄に醫學博士阿部先生と云ふ方が『煙草の利害』と云ふ一文

を書いて居られた、それを讀みまして利害とありますから利益も無論あるんだらうと思つてゐました所が害ばかり、それも是迄承つて居つたよりはひどいやうに書いてありました永い間煙草を用ひておつた者が止めると害があると云ふやうな事を世間で申しますが、そんな事は無い。但し喫煙の習慣のある者はそれを止めかけるとニコチンの分子が大脳の表面に喰付いて居つたのが分離して飛ぶ、其間が煙草を喫んで補給をせんと氣持が悪い、然しそれは十二日ほど辛棒したなら止みますと書いてあります、さうすればちやんと止んでしまつて何等弊害を來たさぬと書いてあるんです、それが十三日から始まつて十七日に終つたんです、私はもう一遍十八日にそれを繰返して私は自分の年齢を考へて見ました、今年六十二だ——それから一年経つて六十三であります——よう考へて見ると云ふと、七十は古來稀なりと云つてひよつとしたら、所ではない七十で死ぬんであらうが、よく煙草喫みの肺だといつて鼠色のやうな汚い肺を見た事があるが、煙草を喫まぬ者の肺は非常に綺麗なものです。吾々もこんな慾を起して、それに耽つたからこんな汚い事になつた、今止めたら七、八年あるから其間には取返すだらう止めてやらう、明日十九日から止めてやらう、それも同じ止めるんなら二つの條件の下に止めてやらう、それには煙草の代用品を一切使はない、オゾンパイプを唾へるとか、お茶でもしつかり飲んで飴玉でもちよい／＼

やつて紛らさうと云ふやうなそんな事は子供のする事だ、自分も六十も過ぎてそんな馬鹿な真似が出来るものか、代用品は一切使はぬ、も一つは、傍に煙草や何か置いといたらとてもいかなから煙管は折つてしまふ煙草は残つたのは焼いてしまふとか何とかやるが、自分は煙草や煙管やなんかさう云ふものを置いておかう、さうして止めてやらう。それだけの煙草喫みですから貰入に少々入れて行つても足りませぬから四十匁包と煙管とを書物と一緒にに入れて學校へ持つてゆくんですが、やはりさうして學校へも持つてゆき、歸れば夜分は枕元へ置いてさうして止めたんです、私の家内等も一週間程は私の煙草を止めた事に氣が付きませんでした、相變らずやつて居ると思つて居つたらしい、又その十二日の間も不安かと云ふとさう云ふいよ／＼止めやうと云ふ決心でやつたからでせうが不安な事は無かつたんです。さうして到頭止んでしまひました、其話を學校で何かの時に生徒に話しました所が親達に話したと見えて、『さうか校長も止めたんなら自分も止めよう』と云つて止められたお人もちよい／＼ありました、又愛媛縣の方にゐました時に、町會議員で六十二三才の一番老人の方にその話をしました所『それは結構な事だ、私も止めませう、が、是迄楽しみでやつて來たので今日一日だけは喫まして下さい、明日からはきつと止めますか』と云はれましたが、きつとそのお人も止めて居られる事と思ひます、どうかこの煙草

も餘り益のないものだと思ひますから、同時に是は煙草の事であるけれども、酒に就ても同じ事ですから酒の意義をよく考へて少々やれば身體の爲にも良い事であるが、少々で止めになるやうに餘り澤山は吞まぬやうにやつて頂きたいと思ふのであります、以上は今日御話申上げる目算では無かつたんですが、前刻の御決議が誠に結構な御決議でありましたから一寸申させて頂きました。

明日は紀元節であります、それに就きまして一寸したお話をさせて頂きます。御承知の通り紀元節は始めて御即位式を擧げられたお日柄であります。其時吾々臣民、吾々の祖先に對しまして詔をお下しになつて居ります、その御詔勅の中の御言葉を出さして頂きます、それは後に書いたもので日本書紀に書いてあるのですが漢文ですから翻譯いたしました、『養正』正しきを養ふとあります、朕も正しきを養ふから爾臣民も養へとあります、紀元節などには吾々國民全體がさう云ふお言葉などを思ひ浮べて思召に叶ふやうにやつたら良いと思ふんですが、さて其の正と云ふのは正しいと云ふ字で、この字は上に一の線を引きまして下が止めると云ふ字、一直線に止まつて動かぬ、曲つたり屈曲したりせぬやうにいつも一直線に踏止まると云ふのが正しいと云ふ意味に出來た文字であります、それは又明治天皇のお示しの道であります、道は須くも離る可からずと云ふのがそれであります。

如何なる場合にも吾々は、離るべきは道にあらず、いつも道に踏止まつて居ればよいのである、吾々は色々の弱點を持つて居るから道を踏み外して居る事がある、然し全然は踏み外さぬからして社會に於て相當の信用なども得て居る、全然道に外れてしまへば忽ち破滅を來すことに決つて居ります、又今の正の字をかう解釋しても結構であります、上の一を正數の一と見ます、正數とは全體と云ふ事ですが、そのいつも一に止つてゐなければならぬ、二分の一、八分の一、甚しきは百五十分の一などもそんな事になつてはいけない、必ずいつも全い、完全なもので無ければならぬと云ふ事でもあります、道徳とはさう云ふものであります、例へば吾々人間がその相手にとりまして、女の方であれば御主人に對しては妻であり、私にしましても私の子供に對しては親であり、妻に對しては夫であると云ふやうに色々の關係がありませうが、その色々の關係に於てそれ〴〵踏む道がある筈です、子として親には孝行せねばならぬ、又妻として夫に貞節を盡さねばならぬと云ふ風に色々の道があります、それを揃はさねば駄目です、人に依りまして親にはよく仕へるが他人には當りが悪いとか、子供は可愛がつてよく世話をしてやるが舅姑には辛く當るとか何れも駄目です、不道徳です、揃はねばいけません、子供に對してよくしても一方で舅姑さん等に甚だ不幸な事やつて居るとなると、子供の教へになりますまい、子供の教育に骨折つて

居てさう云ふ事で悪い點を示してゐる、それでは本當の教育は出來ません、總てを揃はさねばいかなのです。

人間には器の大なる者と小なる者がありますが、どちらにしても小なれば小なりに道を踏み外さぬやうにやつてゆくのがそれが道徳であります、要するに正と云ふ字をどう解釋しましてもさう云ふ思召であると思ひます、只今拜聽しました教育勸語にもこの道は非常に大切に道であるから之を大事に守つてさうして威、その徳を一にせん事を庶幾と仰せられて居ります。朕もこの道を行ふ所の徳を養ふやうにするからして爾臣民も同様に徳を養ふやうにしてやりたいものだと云ふ、有難いお言葉であります。そこで私は今日その徳と云ふ事の説明をさして頂くのですが、此方さん等は失禮な申分ですが知識階級の方がお揃ひであるから、甚だ烏滸がましいのですが、一寸言はせて頂きます。

道徳の徳と云ふのはどう云ふものかと申しますと、いつもその中心に人間の本心が働いて居ると云ふ事で人間の本心、良心とか云ひます、それが吾々の心の中心と申してよろしいが、その本心がお留守になる事があります、とかく吾々人間は自分の家の鶏がどこかへ飛んで行くとそれを取戻さうとしますが、自分の良心がいつの間にかやら飛んでしまつてもそれを探して取戻さうとせぬのは愚の至だと云ふて居ります、その本心、真正直な心持、そ



の心から出て道に叶ふた行をする習慣の事です、それを徳と云ふのです、假令表向道に叶ふた行をしてゐました所で汚い心から出てゐてはいけないのです、例へばこんな物遣らいいでも良いのだが、又向ふから返禮呉れるから、やつて置かうの、得になるからどうのと云ふやうな心から出て、道に叶ふた事をやつてゐても駄目で、そんな事繰返して習慣になつたら悪者になつてしまひます、そんな心持でなく人を可愛いがり人を敬ふと云ふ心持から出て道に叶ふた行をする習慣を徳と云ふのです、さうして其習慣と云ふものゝ出來方を考へて見ると、習慣と云ふものは人の話を聞いたからと云つて出來るものではない、習慣の出來方は同じ事を繰返し／＼するので出來るものです、さうすると徳を養はうと思つたら眞心から出て道に叶つた行を繰返し／＼やつて居れば出來ると云ふ事になる、慾の起つた時に吾々の本心を働かす、慾のまゝにせられず、慾の起つた時には吾々の本心を出して來て、その本心が慾を一遍突放す、さうして其の慾の意義を考へて、意に叶ふだけの慾の満足をしてやる、それを繰返し／＼して居つたら、食事をすると云ふやうな事に就ても立派な徳が出來るのです、徳と云ふものがそんなものであるから、それを文字に就て考へて見てもよく其意味が解るので、あれは昔、支那で拵へた字ですが、徳と云ふものゝ性質、出來方をよく會得して、その符牒に作つたものです、あれは御承知の通り漢字を三つ組合

せて、一つの行、一つは心、行と云ふ字は偏だけ採つて旁は捨て、しまひ、右側の旁の方に下に心と云ふ字がありますが、その上には十を書きまして四のやうな風に書きましてそれは何と云ふ字かと云ふと直と云ふ字です、四のやうにあるのは四ではなくて目であります。四は中がルのやうになつてゐるのが四であります。その心の上に直と云ふ字を書いて徳と云ふ字に拵へたんです、直と云ふのは眞直と云ふ事です、言葉なり實際の事柄なりの符牒が文字ですからその符牒を作るのに一番最初に一直線を書いてそれを眞直の符牒にしようと考へたに違ひないが、それでは一つと云ふ時にも之を書きますから、是丈ではいかんからして眞直と云ふのは、何れかう目で試してみても一直線であれば眞直と云ふのだから一人の目を見て眞直である、十人の目で見ても眞直であると云ふのが眞直だと云ふので十と書いて目をかいて、一やつて、その下へ心とやりましたら長過ぎて釣合が悪いから釣合ふやうに目を横に持つて行つてさうして徳と云ふ字が出來て居ります。それで先に申し上げました徳の意味が字に表れて居るのです。眞正直の心から行ひ／＼して居れば出來る習慣だとかう云ふ事に出來て居ります、それで御同前は陛下の思召を體しまして道に叶ふた行を繰返し／＼この徳を養はねばならぬのであります。

吾々人間に大事な事は色々あります、智慧と云ふものも大事、技能と云ふものも大事、

才能と云ふものも大事、財産と云ふものも大事、名譽も信用も大事ではありますが、まあ大事なものには徳でありませう。徳が備つて居ればどんな事でも出来る、社會へ出て怖れるものなく、困難も亦突抜ける事も出来ませう、誠に有力なものであります、少々貧乏しても徳が備つて居ればやつて行ける様に思ひます、尤も徳が備りながら餘り貧乏する様な事も無い筈ですが、さうなれば金の有餘つた人がどうぞ使ふて下さいと云ふて向ふから持つて來るでせう、少々智慧が足らぬでも、又お金なんか無くても、是は拜借と云ふ事が出来るんですが、徳ばかりは拜借と云ふ譯にはゆきません、どうしても徳は自分で作り上げねば出来ませんから人様から拜借と云ふわけにはゆきません、さてそれでは徳を養ふにはどう云ふ心持からはいるかと思ふと、幸ひ御同前は禽獸と違ひまして生れながらに色々の立派な心持を恵まれて居ります、例へば子供の時からこの恥かしいと云ふ心持を持つて居ります。犬猫には恥かしいと云ふ氣持は無いと見えます。この恥かしいと云ふ氣持を教育すれば宜しいので、この心持を培養し／＼致しますと、自分も人間の皮被つてゐてかう云ふ禽獸のやうな事をして居る、恥かしいではないか、もう是からは人間らしく人の物などは取るまいと云ふ風に人間の道に叶ふた行が出来るやうになります。又思ひやりと云ふ事が、子供の頃からありますが、是も幼い時から培養してやりましたらそれからでも道には

いる事が出来るんです、報徳會の狙ひ所は何處にあるかと申しますれば、是れはもう一つの有難いと云ふ心持、愛する分子もあり、敬する分子もあります、他の人様を大切に社會を大切にする日本の國を大切に、何も有難い、何誰に對しても有難いと云ふ、だからしてどうしても御恩報じをせねばならぬ、さう云ふ心持から出て道に叶ふた行ひをして徳を養はうと云ふのが御同前報徳會の本當の主義であります。其處で御同前は何とかして、何時でも何處でも何誰に對しても何物に對しても有難いと云ふ氣持の起るやうにせねばならぬのです、所が人間は勝手なもので有難い事をば何ともないやうに思つて居るんです、先づ御同前が人間と生れた事は本當に有難いと云ふて感謝せねばならぬのです、がね、蚤や虱によくまあ生れなかつたと思つて感謝せねばならぬのです、目や耳なんかでも是は犬猫のとは構造が違ふさうです、人間のは色々な物が見えて形が見えて又天然自然の景色なんかは殊に奇麗ではありませんか、その中でも奇麗なものは人間ですね、それも御婦人より男子の方が奇麗です、私の顔を見て下さい、と云ふやうなものです、報徳會に出ましてもピアノのあるのは此方さんだけですが、ピアノの好い音も聞けますし、本當に人生は有難いものだと思ひます、夜分寝みましたらあなた任せでせうが、その間に死んでしまつたらどうでせうか、明日になつたら都合よく又目が覺めます有難いものです。

人間は實に勝手なものですから、又自惚心と云ふものがあつて自分に惚れ込んで居るのです、自分を買被つてゐるから寫眞など寫しても寫眞屋さんの方ではよく撮れてゐると思つても其儘渡したら氣に入らぬので、お婆さんの髪の毛の薄い所をかう直して置く、この奥さんは可愛らしい目だが少し細いから太く修整する、さうするとあの寫眞屋は上手だ、又頼まうと云ふ事になる、こんなのは御婦人に多いさうですが、男の方には又自分の智慧とか才覺と云ふやうなものを非常に買被つて居る、だから修養を怠ると云ふ事になるのですね、會社にでも務めてゐるとすれば、社長はどうも目が見えん、俺が是丈の働きをしてゐるのが解らぬのかと云ふので、社長さんの方では岡目八目でちやんと解つてゐるが、自分を買被つてゐるからそれが解らない、色々自惚もある中にどうしても非常に禍の基になつて吾々が道徳にはいる一番邪魔になる自惚が一つあるんです、それを打ち碎いてしまはぬと報徳會で實行問題を協議して居つても、道にはいれませんが、私が是から申上げる自惚を、是を打破らんといかんのです。

それは吾々人間の本當の力を見ると云ふ事で、生かされて生きて居るのだ、それが大部分だと云ふのですが、所が人間は自分の力を買被つて、何、そんな事があるものか、己の力で生きて居るのだと、豪い人ほど自分の力を買被り、生きてゐる許りぢやない俺の家族も俺が養つて居るのだと云ふやうな非常な強情我慢な氣で居るからして、どつちへ向いても有難いと云ふ氣持が起らぬから道にはいれない。其處で私の見解に言はして頂くと吾々人間は自分の力で生きて居ると云ふよりは寧ろ他から生かされて生きて居ると云ふのが人間の眞相だと思ふので是から説明させて頂きます。

先づ生きて居ると云ふ言葉を調べて頂きたい。生きて居ると云ふ言葉の起りは、死と云ふのを省いて、呼吸（イキ）して居るのを省いて、生きて居ると云ふので、死んでしまへば呼吸しませんからね、さう云ふ言葉は吾々が生命を繋ぐのに空氣の呼吸が大切な事を意味して居る。その呼吸は誰がして居るか、自分がしてゐる、と思つてゐるんですが、考ると呼吸を太くするか細くするか、速くするか遅くするか、あとは自分の力で出來はしません一時間程呼吸を休んで見ようとしたとて五分と休めはしません、自然に呼吸してしまひます、眠つてゐて何も知らずにゐても自然に必要な呼吸はしてゐるので、私は自分で呼吸して居るとは言へますまい、之をどう説明するかと云ふと理學者とか生理學者とかはさう云ふやうに人間は出來てゐるものだと思ふので、甚だ勝手過ぎてゐるんです。

吾々が生活の爲めに何かと働いて食物を補給せねばならぬ必要が起つて來ましたら、自分がどれ、食ひたうなつてやらうかとせいでも自然に食ひたくなり、さうして食べて悪い

やうな物ならまあ非常に臭氣があるとか何とかで自然に吐いてしまふ、その反對に養ひになるものなら自然に愉快に口が働いて、そして吞込んでしまへばもうあとは神佛にお任せする、すると他の仕事をやつて居つても自然に明朝になりましたら滓だけが出ていつてしまふ、犬猫までもさう云ふ恩恵に與つて居ります。是はみな神のお蔭であります。もう一つ人間に有難い事があつてそんな風にして食べてもう適當と思ふ頃にはもう置けと云ふ神の御命令が出て來ます、それを食べたいくで背くと云ふと暫くして、痛み出したり上げ下げすると云ふ事になります、それもさうやつてひとりで出して下さる上に罰として腹痛と云ふ痛い目に遭して下さるんですから有難い、腹痛になつても有難い、本當にさうでせう、本當の理屈はかうだと私は思つてゐます。

食物そのものに就て考へましても主な食物はお米ですが、原産地は日本ではなく印度です。印度の野生の米と云ふのは粒の小さい、赤い皮を被つた硬いものですが、それが突然にこんなお米になつた譯ではないので、昔からだんく培養されて來て今日のやうな立派なお米になつたのです、然し生では消化も悪いし、火はどうするかと云ふと、今はマッチがあるが昔の事を考へますれば吾々の祖先が初めて火を發明した時の事を考へて御覽なさい、人間も太古の時代には火を起すことを知らなかつたのが今では電氣さへ起してそれを

利用する迄に進んで參りました、最初火を起すには難儀したのでせう、森などの樹木が風で擦れ合つて發火した現象を見てそれから木と木を擦合せて火を起すことを發明したその苦心は大抵では無かつたと思はれます、それで今でも伊勢の大廟などに參りますと云ふと御燈明の火でも御飯の火でも宮掌と云ふ神主さんが木の先と先とを擦合せて火を起してゐられるのです。更に其食器にしても今日では種々の便利な器があつてそれを勝手に澤山使つてゐますが吾々の祖先の時代を考へますと、昔の風などが大嘗祭などに残つてゐる御即位式の後に陛下が 天照大神始め神々様をお祀りなさる、其時用ひる御飯を入れる器が柏の葉で拵へるものさうで、丸い形にして御飯を盛り汁氣のあるものは同じ柏の葉でお椀のやうに何枚も寄せ集めて作つたものを用ひ、又お箸は二本の棒とは違ひ一本の竹を曲げて糸で縛りましたもので非常に使ひ難いのですが、陛下は三口程召上つたと云ふ事です、それが太古のやり方で吾々の祖先がやつて居つたんですがそれは未だ進歩した方で原始時代には乾いたものは掌へ載せたんです、少し汁氣のあるものは掌の窪をして載せたので今では印度の土人がやるのと同じで、その證據は柏の葉で作つた平たい方のお皿のやうなのをヒラデと云ひお椀のやうなのはクボデと云ふ名が残つて居ります。その他おかずと云ふのも、色々なものをかすく添えるからおかずであつた、玄米食にはおかずは入らな

いと云ふのは養分が含まれてゐてあれ一式でも構はぬ位のもので、白米にして食べると養分が足らぬから色々添えるからおかずで、言葉の起りはみなさうです。昔は何事も簡単であつたからおかずなどの事も、なと云ふたのです、それをあまな、からなと云ふ風に分け、又さかなと云ふのも拵へた、お酒を飲む時にはやはり魚類の方が向いたと見えます。又まなと云ふのは本當のなと云ふ事で宮中ではお魚の事をおまなと云つて居られますが、粗板と云ふのもそれから來たのです。古い事では 應神天皇、仁徳天皇様あたりには蕪も大根も傳つてゐます、外國から傳つたのです。奈良時代には蕪の煮たのなんか珍重したもので、らしく人に歌を送つて蕪の煮たのを持つて來いと云ふ歌などもあります、萬葉集に残つて居ります。蕪はあまなの方に入れ、大根はからなの中へはいつてゐますが、昔から辛かつたと見えます、あの大根も植物として釣合のとれてゐないもので根ばかり太いのです。が天然のものもつと釣合がとれて居る筈です、些か根の太いやうなのを、人間が多年培養してあゝ云ふものを拵へて根が太いから大根と云ふ名前を付けて今日では樂々と頂いて居るんです、是も多年吾々の祖先が開拓して來た立派な文化であります、文化と云ふ言葉は獨逸から出て來た言葉で『クリツール』英語で『カルチュア』と云ふんですが、是は耕作と云ふ事から來たのです、地面は自然の儘ではさほど人間に役立たぬから人力を加へて

耕作開拓して米や麥を作れるやうにした、それが文化です。然し獨逸で本當の文化と云ふのは何であるかと云ふと、人間を開拓して人間が自分の心を開拓して義務の爲に義務を行ふやうにしたならばそれが文化であり、道德の爲に道德を行ふ事が文化だと云ふので道の爲に道を行ふと云ふ人間を作り上げるのが本當の文化だとカント等が説いてゐます。お互にさう云ふ風にやつて參りたいと思つて居るのであります、甚長談義を致しました。

(昭和八年二月十日御講話)

# 報徳會總務所幹事

山崎和宏先生

三六

爰に當報徳會の創立滿五周年の記念會をお開きになりまして、かくも盛大に御營みが出來ますと云ふ事は、國家の爲衷心より御慶びを申し上げたいと思ふのであります。

明治天皇様の御製にかう云ふ意味の御製があつたかと思ふのでありますが、其儘記憶致して居りませんが、子供と云ふものは三つ四つ頃迄は何となく足どりが頼りないが、五つとなると確かなものだと思ふ意味の御製が御有りになつたやうに思ふのであります。お互人間は共通でありまして、三つ四つの間は歩いて居つても躓きはせぬかと案じられるが、愈々五つとなると仲々歩き方が確りして來る、人間許りでなく其他のものでもさう云ふ具合であらうと思ふのです、精神修養上の團體は趣旨に賛成すると云ふと直ちに生れるんであります、所が之を長く續けると云ふ事が餘程骨の折れる事で御當會が滿五年の記念日をお迎へになる、このお世話方の骨折は申す迄もなく會員方がお世話方のお世話に對して

喜んで下さらぬでは全く水の泡になつてしまふ、其意味から申しまして爰に御世話方の志と會員のお心持とがよく一致して來た、是が今日の滿五周年をお迎へになつた所の主なる力であると私は思ふのであります。若し中途にしてお世話方の世話が鈍つて來るとか、或は會員の側に倦が來ると云ふやうな事ならば、とても今日を迎へる事は出来なかつたであらうと思ひます、私は御創立以來今日迄大抵一年に一回か二回多い時には三回位お邪魔を致し、實は二年乃至三年位の間はお世話方の熱心振りには敬服して居りました、あれだけ骨を折つて下さるのにその志が徹底しないのだからかと私は感じて居つたのであります、丁度其當初はいま 明治天皇様の御製に就て申し上げました様に、此所の歩きかけ頃であつた、昨年是一年に三、四回御邪魔しましたが昨年の春頃からめつきり様子が變つて來た年末にも御邪魔を致しましたが、その時も同様であります、之で愈々帝塚山報徳會は足取が怪しくない、堅實なる歩みが出来る會とおなりになつたと云ふ事を見届けて心強く思ひましたが、愈々今晚かうして創立後滿五周年を迎へて御目出たい事であり、併し之でもう大丈夫と氣を許すと、だれて參ります。

今上陛下の御即位式の時の御勅語の中に『教化ヲ醇厚ニシ』と云ふ事を仰せられて居る大正天皇様の頃には教化と云ふ言葉をお使ひになつて居られませんか所が 今上陛下が御

三七

即位式に賜つた所の御勅語の中に特に『教化を醇厚ニシ』と云ふお言葉を賜つた、大昔  
 崇神天皇様が四道將軍を八方に御差遣になつた時に、其勅語の中に『民ヲ治メル所ノモノ  
 ハ教化ニアリ』と云ふ事を仰せられて居る、四道將軍と云ふと惡者の討伐の大將のやうに  
 聞えますが、今の知事さんのやうなものであります、不都合な者が出たならば討伐をする  
 と云ふ権限はあるが、人類を治めるのが本來の目的であります、『民ヲ治メルノ本ハ教化ニ  
 アリ』と云ふ事は特に 崇神天皇様が仰せられて居る、教化をせずして政治を行ふ事は  
 出来るものではない、どうしても民をうまく治めてゆき、民の幸福を圖らふと思ふならば  
 先づ教化をしなければならぬ、だから民を治むるの本は教化にありと仰せられたと思ひ  
 ます。この大昔の詔と同じお心持で 今上陛下が御即位式の時に御煥發になつて居る、今  
 日の時勢はどう考へて見ましても、何が一番手薄であるかと云ふと、教化が一番手薄であ  
 ります、此際 今上陛下の大詔に力を用ひ、經濟上の事も、思想上の事も何等憂ふる事  
 なきやう、どうも教化と云ふ事に就ては爲政者も直接の催促がないからつい知らん顔をし  
 て居ると云ふやうな傾がある、無頓着な町村長には何の事か知らないと云ふやうな事であ  
 ります、縣下に一人の赤色が出たからと云つても安閑として居る人がある、可成高い所の  
 地位にある人さへさう云ふ無責任な事をして居る、それではとても本當の政治は出来る筈

はありません、教化と政治は離すべからざる所のものである事は大昔 崇神天皇様が仰  
 せられて居る、今日の時勢を説く爲には教化を徹底的に全力を擧げなければならぬ、其意  
 味から云つて當報徳會は皆さん御自身の爲にも及ばずながら國家の爲にも益々發展をして  
 貰はなければならぬと思ひます、此意味に於きまして御當地附近で五ヶ年以上御勤續の方  
 々が當會の名を以て表彰せられると云ふ事は實に結構な事であり、とかく人間と云ふ  
 ものは表彰を受けると云ふと責任が重くなる、私はあの時にあゝ云ふ表彰を受けて居る、  
 さうすればあゝ云ふ事は出来ない、かう云ふ事は出来ないと思つて自ら自分を正しい方に  
 導いてゆくと云ふやうになる、實に結構な事であり、五ヶ年以上同じ所に御勤務に  
 なつて居ると云ふ事は餘程の御骨折であつたと思ひます、まだ其上に何年續けられるか解  
 らないが、ものを途中で挫折せず續けると云ふ事は成功の基であります、其反對に若い人  
 を戒める句に、かう云ふ句があります。『たゞ迂濶々々と二拾年』二十才迄は迂濶々々して  
 暮してしまふ、其次に『あれやこれやと二拾年』で四十才になつてしまふ、『是れはくくと  
 二拾年』でもう六十才になつてしまふ、それではどうも一生涯お前は何をして居つたのか  
 と云ふと、あれやこれやとやつて居りましたではいかん。幸ひ皆さんも五ヶ年と云ふ基礎  
 が出來た以上は、是からあれやこれやとなつては不可ません、やつぱり一本槍でいかねば

いけません、たゞ迂濶々々と二拾年あれや是やと二拾年これはくくと二拾年、此句を忘れぬやうにして下さい。かう云ふ狼狽者が世の中でもう頭が禿げたり白髪になつて、取返しがつかぬと云ふやうなのが何ぼあるか解りません、この住吉区内でも模範的の成功者が随分お有りになりますが『斯道』と云ふ雑誌に載せさせて頂いた所の石炭問屋の宗像半之丞さんでありますがあの方は、あれやこれやとやらなかつたから、それはくくと吃驚しては居られぬのであります、子供の時分に大阪へ御奉公に來られまして其からそれで押し通されたんであります、到頭今日は大阪に於ける一流の石炭問屋さんになつていらつしやる御主人の按摩を每晚やらされ、その爲に爪が脱けたさうであります、それ程忠勤されたんであります、愈々自分が獨立して商賣を始められ石油や揮發油などの商賣でしたが家主が何時火事をやるか分らぬから出て呉れと云ふので、私は決して火事はやらぬから安心してくれと云つても家主は仲々強硬に談判する、安心ならんと云ふのです、私は油断せぬ、決して油断せぬから貸して呉れと云つても、寢て居る間は仕方がない、いや寢て居る間も油断せぬと云ふ、それではと其晩十二時頃に若しくと云つて聲を掛けて見た、寢て居ると思つて居つた宗像さんが返事をした、又午前三時頃に聲を掛けても『はい』と云ふ、何時聲を掛けても起きて居る、每晚同じ時刻にやつたら駄目だからと、明日の晩は三時頃、其

次の晩は一時頃に聲を掛けにゆく、何でも一週間か十日程續いたさうです、意地悪の家主だから、うつかり寢て居つたら出てゆけと云ふ譯です、所が幾晩訪ねて行ても一寸聲を掛けるとすぐ返事をする、この男は寢て居つても氣を付けて居るわいと云ふ譯で之なら大丈夫貸して遣らふと云ふので其所を足場として石油店を始められたんであります、今日では大成功をして住吉区内にお住ひになつて居る筈であります。

今晚御集の方は、各種各様の方の御集りでありまして、世界の事情、殊に日本の現状に就きましてはよく御研究になつていられる方もありませうが日々の仕事で忙しくて新聞見る間もないと云ふ方もあらふと思ひます。今晚は若い方が多いから國際聯盟の事と熱河省の事とを少しお話致しませう。國際聯盟が出來たのはどう云ふ動機であるかと云ふと『ヨーロッパ』の大戦、五ヶ年餘のあの大战の爲に非常に澤山の人が戦死をしたり傷いたり、一方に於ては非常に澤山のお金を費した、地震や火事が恐ろしいと云つても生命財産に大影響を及ぼした事は少い、そこで愈々ドイツが閉口垂れまして、萬國平和會議が開かれました、大體に民族自決主義と云ふやうな事から『ヨーロッパ』には小さな國が出來た、『ルーマニア』が三つ四つに割れたり、『ポーランド』も獨立する、『チェッコ』、『スロバキヤ』と云ふやうな國も出來た、『フィンランド』も獨立する、其時に『アメリカ』の大統領が國際聯



盟と云ふものを拵へて二度と再び戦争はやらぬ事にしようではないか、と云ふ凡そ戦争位惨酷なものはないから、こんな大袈裟な戦争はやらぬ事にしよう、國と國との間の問題は戦争しないでお互に折合つて仲裁をして問題を解決するよう國際聯盟を拵へよう云つてアメリカの大統領が問題を出した、誰も不賛成は言へませんから、話が示談で済むなら是に越した事は無い、と云つてトン／＼拍子に國際聯盟の會議は纏つた。其所で各國が各々元首の批准を経まして、國際聯盟に加盟する事になつた所が、其後國際聯盟の發起人のアメリカが國へ歸つて、かう云ふ事にしたからアメリカもはいらうちやないかと云ふ事を議會に出した、大統領が原案を出したと同じである、然るに議會に懸けたら議會が承知しない、アメリカは『モンロー主義』でアメリカ以外の事には嘴を入れず又入れて貰はぬと云つて、折角大統領が人道主義に立脚したのに發起人であるアメリカははいら無かつた、そこで大統領は面目玉が潰れた譯であります、ロシアは其當時は革命をやつて間もなしであつたから混雜して居つたから國際聯盟にはいる所の騒では無かつた、その聯盟の中に、所謂大國とでも云ふか強國とでも云ふか、英、米、佛、獨、日本と云ふ五ヶ國が常任委員國となつた、その常任委員の他に臨時の委員となる國が十ヶ國出來た、これであら國際聯盟の格好と云ふものが出來た譯であります。

それで國際聯盟を創立してから今日迄の間に起つた所の大きな問題は何かと云ふと日支紛争即滿洲國の獨立問題であります、そこで我日本は滿洲を擁護して東洋の平和を確保する爲に滿洲を獨立國としなければ東洋の平和は護れないと云ふ立場から滿洲に對して相當の援助を與へたのであります、支那は其に對して日本に向つて直接抗議を申し込むよりは國際聯盟と云ふ結構な聯盟があるから聯盟の力を借りて日本を凹まして貰はうと『日本がこんな事をしたから日本を叱つて呉れ』と云ふ譯であります、そこで國際聯盟は何とかして日本に手を引かせよう、支那の要求を入れようと色々手を盡して品を替へて追つて來る、處が日本では東洋の平和の爲、滿洲と云ふものを支那本土から離してしまはねばいかん、それでなければ東洋の平和は護れない、何と云つても日本は東洋の盟主である、若し日本が貧弱な纖弱い國であつたならば忽ちにして日本は印度、アフリカなんかと同じやうに白人が蹂躪してしまふに違ひない、日本は東洋の盟主として何處迄も自分の力でやらねばならぬ、滿洲を獨立させねばならぬと云ふので國際聯盟の言ふ事を聞かない、國際聯盟はそこで、是では駄目だからと云ふので、リットン卿が六ヶ月も懸つて日本と滿洲と支那とそこら中を廻つて御馳走をよばれて贅澤な旅行をして歩いた、二度と出來ませんよあんな旅行は、死土産だと思ひますね、此奴を怒らしたら一寸都合が悪いから優待しますわね、ど

こでも。支那は尙更、あらゆる力を以て優待して、優待の仕振がちつと宜かつたと見えてリットン卿はヨーロッパへ歸つて報告を拵へた、素晴らしい長い報告を拵へたさうです、その報告を秘密にして長い間發表しなかつた、それを發表して見ると日本の爲には非常に悪い不利益なもので、滿洲は元來支那の領土である、之を獨立させると云ふ事は支那の領土保全と云ふ目的にも叶はないから、獨立は認められないと云つて日本の主義を頭ごなしにリットン卿は打壞した、そこでリットンの報告を土臺として委員會議を開き最後には總會を開いた、その會議の形勢が日に／＼日本の爲には險惡になつて來た、所で日本は聯盟から如何なる事を云ふて來た所では是等の云ふ事を聞いては東洋の平和は護れないから、斷じて主張を引かないと云ふ堅い決心があつた、その爲には陸海軍は相當の準備を着々進めつゝあつたのであります。

そこで國際聯盟の規約の第十五條の第三項によつて日本と支那とを圓滿に妥協させようと云ふ手段をとつた。所が此和協は不成立に終つた。第三項にはどう云ふ事が有るか云ふと、聯盟理事會はなるべく平和的に都合よく和協が成立するやうに務めて、其努力が効を奏した時は一切の解決條件を記載せる調書を發表すると云ふので、つまり世界中にその顛末を知らせるのであります。それが第三項であります、日本が承知しなかつたから出

來なかつた、又支那もやはり和協條件に對しては不承知の點もあつたのであります、何故國際聯盟の空氣がさうなつたかと云ふと、聯盟加入國は五十六ヶ國で、その中堂々たる世界の強國と云はれるのは五、六ヶ國しかありません、あとは團栗の背比べで貧弱な頼りない國ばかりであります、數が多いから聯盟の規約と致しましては何の位小さな國でも一國一票の權利がある、英國や日本が二十票位、小さな國が一票と云ふやうな差があればいゝが小さな貧弱な國でも一票として權利がある、そこで小國側が頑張つたんであります、小國の代表者が何故頑張るか云ふと日本は國こそ小さいが強國であり、支那は大きいが弱國である、弱國が強國にいちめられて居る、支那が日本からいちめられて居ると思つて居るので此際弱國の爲に肩を持つて置けば將來自分の國が安全だと云ふので自己本位から割出して支那の味方をしたのです、こん畜生と私は思つてゐます、支那が可愛ひいから支那の味方をしたのではないのであります、痛められるのが辛いから此際日本を押へて支那を助けたならば將來我國が安全だと自己擁護の爲、それを主張してしまつて多數決でゆくから仕方がない、大部分の國がそれでゆくの、フランスは日本に對してかなり好意を持つて居つたが多勢に無勢、數でいけば負けまゝ。結局は和解と云ふ事は不成立に了つたんであります、それが不成立ではどうするかと云ふと、第十五條の第四項にあります。紛争

解決に到らざる時は——どうしても解決せぬ時は、ですな——聯盟理事會は全會一致でやるか、又は過半数の評決によつて互に紛争の事實をすつくりその儘を、公正且つ適當と認める勸告をすると云ふのであります、日本に向つては、日本は滿洲國を承認したが、滿洲の獨立を承認したが、それは取消しなされた方が宜からう滿洲に擴げて居る兵隊は滿鐵の附屬地へ纏めてしまつたら宜からうと云ふ事を日本へ勸告して來た譯であります、支那に向つては何を勸告しただらうか私は知らないが、是は聯盟が『斯うしろ』と云つて拳を振上げた譯ではなく勸告であるから、小便をやつとる人に、お止めなさいと云つて止めると同じ事であつて、其勸告をすると云ふのが、今の第十五條第四項であります、それを日本と支那に突付けて尙世界中に發表すると云ふのであります。

然らばその勸告を受けた國はその勸告に服従する義務があるかどうかと云ふと義務はない、止めたらどうかと云ふだけでありますから服従の義務はありません。そんな勸告で、はい止めますと云ふやうな腰の弱い事を云つて指を啜えて居る様な日本ではない、まかり間違へば拳を振上げる準備もして居る、國際聯盟から厭な事を突付けたら、そんなら止める、籍は置かぬと云つて横へ退いたんです、松岡全權は俺は歸ると云つて尻を捲つて歸つたんです其處らは非常に男らしい所であると思ひます、日本魂の現れであります、所が國

際聯盟を脱退すると云ふ事がどんな結果を及ぼして來るかと云ふと、脱退するには二ヶ年前に豫告をしろと云ふ事になつて居ります。三月廿日前日に脱退を宣言するらしいがそんな所に籍を置くのは厭ぢやからと云つて直ぐ退くと云ふやうな勝手な事は出來ない、二ヶ年前に豫告すると云ふ規約がありますから今年の三月廿日に愈々脱退すると云ふ事を發表しても事實脱退するのは今から滿二年後と云ふのであります。

この勸告文に對して日本の立場を世界に發表する、是が即ち陳述書であります、大分長い陳述書が發表されましたがその決論は今申ました様に、日本はどんな事をしても滿洲と云ふものを擁護して行かなければ東洋の平和は忽ち攪亂される、日本が滿洲を手離しせぬと云ふのが其根本主義であります。さうして愈々脱退すると云ふ事になつたらどうなるかと云ふと是が問題であります、經濟封鎖が一つの問題であります、日本が退いたからと云つてすぐ叩きには來ない、そんな聯盟ではないが、經濟封鎖はどうであるかと云ふと、先づその手始としては英國、フランス邊りでは、日本及支那に對して兵器を一切賣らない戦争の道具を賣らないと云ふやうな事を發表して居ります。

是で困るのは、支那です、支那はアメリカ、ロシア、英國邊りから盛んに兵器を買入れてそして日本に對して戦争の準備をして居る、日本は今すぐにアメリカや英國、佛國等から

武器を賣つて貰はんでも充分やるだけの準備は出来て居る、だから武器を賣らぬと云ふ事を發表して差當り困るのは支那であります一方經濟封鎖はどうかと云ふと、何處の國でも經濟状態は世界的のものであつて、一國だけで經濟を立て、ゆく國は何處にも無い、昔徳川時代には經濟封鎖を自分でやつて居たが、今世界中何處にも徳川時代のやうな事をやつて居る國は無い、御互ひに自分の國に入用の物を外國から買ふ賣る、所謂通商貿易をやつて居る、日本はどちらかと云ふと物資の少い國だから買つてそして之を加工して又賣るその主な物は綿であります、外國から綿をウンと買込んで、其綿で絲なり織物なりを作りまして、之は支那印度或は南洋にゆくと云ふ風に原料を買ふて製品にしてその製品を又海外に出す、所謂日本は其工賃を取つて居るやうな譯であります。

經濟封鎖をやつて日本に綿が來ぬと云ふ事になつたらどうなるか、アメリカで取れる綿の約一割は日本へ來るのでアメリカから綿を買はぬと云ふ事になつたらアメリカは一割の綿を持つて行く所がないから必ず困る、アメリカとしては大打撃であらう、印度からも綿は毎年百五十萬俵も來ます、印度は英領の印度でありますから日本が綿を買はぬと云ふ事になれば困るのは英國である、而も日本が作つた絲なり織物を可成澤山に又印度に向つて逆輸入して居る、ですから經濟封鎖をやると印度に住んで居る印度人の爲にも、採つた綿

は賣れないは、日本からは日本で作つた糸なり織物は印度へ來ないは、と云ふ事になつて印度人は非常な打撃を受ける譯であります、それから日本が毛織物の原料である綿羊の毛を輸入して居ますが、この綿羊の毛はやつぱり英領の濠洲から來るんであります、若し日本が濠洲の毛を買はないと云ふ事になるならばやつぱり濠洲はお客様が無くなり、忽ち困る譯であります、之と反對に日本の産物であつて海外に出て居る主な物は何と云つても絹糸であります、之の大部分がアメリカへ行つて居る、アメリカの婦人の沓下は皆絹ださうであります、非常に贅澤な沓下をはく習慣がついて居る、そのアメリカの婦人に向つて、日本から絹が來ないから、木綿の沓下をはけと云つてもはきやしません、日本の大昔は麻を着てゐたんです、木綿は着てゐませんでした、所がどうでせうか、木綿は綿が來ないから、又毛織物の原料が來ないから、自給自足出來ないから麻を着ようと云つて麻を着る事になつたら冬が越されはしません、それと同じ事であります。

今アメリカの婦人に向つて、明日からは木綿の沓下をはけと云つても、大統領が命令を出しても駄目、仲々男の云ふ事を聞かない、アメリカと云ふ所は女が威張つてゐるから日本から絹が來ないのなら、日本に對して經濟封鎖を止めて呉れと云つて婦人から持ち出す絹一つから見てもこの通りです、其他のものでもお互に賣買をして文化の生活が出来て居

る、この今日の文化程度を急に引下げようとしても何處でも到底出来るものではありませ  
 ん、日本を經濟封鎖して困らすと云ふ事は結局世界中が困る事になります、殊にアメリカ  
 や英國は到底出来はしない、藉に經濟封鎖を二、三ヶ月位やつて困らしてやらうとする  
 と、アメリカと英國とが外國の船もは入つて來られぬやうに、日本の船も出られぬやうに  
 日本の海岸を封鎖するには、兩國にどの位軍艦があつたからと云つて日本の周圍を取圍む  
 だけのものは無い、飛行機でどんく打壊して沈めてしまふのに譯は無い、さうすれば逃  
 路はあるものと思はなければならぬ、此方の方が空いて居ると思つたら隙いて居る方から  
 出てゆく、出てゆくには商船だけで出て行かうとしたら危いから軍艦と道づれになつてゆ  
 く、それを發見けて邪魔しに來るとドンと始めると是が開戦です、今我國の海軍はその位  
 の覺悟はして居るんです、武力で以て之を監視と云ふやうな手段に出るならば此方も武力  
 で以て向ふと云ふだけの腹はあるんです。まあこんな考へですから私は經濟封鎖と云ふ事  
 は云ふべくして行はれぬ、大日本帝國を經濟封鎖する事は出来ない、もつと小さな國なら  
 ば或は經濟封鎖しても世界的に痛痒を及ぼさぬかも知れませんが、何と云つても日本は世  
 界の五大強國の一つであります、この日本を經濟封鎖する事は結局封鎖した奴も苦しいか  
 ら容易に起らぬ事であると思ひます、それに持つて來て、是亦天祐でありますが此頃どう

ですか遠い所から睨んで居つたアメリカが銀行の破綻で、大恐慌を來して居ります、其上  
 に日本に向つて經濟封鎖でもやらうものなら恐慌の上塗をする事になるから、到底アメリ  
 カとしては今日手出しをする所の力は無いだらうと思ふのです、アメリカがやらぬとすれ  
 ば、英國だつて何を好んでやりに來ますか、とても英國はやりに來ないと思ひます。

それからもう一つは委任統治の問題であります、委任統治の問題は南洋の元々ドイツの  
 領地である眼に見えないと云ふやうな小さな島であります、あの島を全部寄せますと云  
 ふと、面積が丁度日本の東京程あるさうであります、その實は小さな人の住んでゐない島  
 が多いので、あれはドイツのものであります、が歐洲大戰の結果ドイツから取上げた、平和  
 會議の際にあれを日本に治めて呉れと云つて萬國平和會議から預つたもので、日本の領地  
 では無いが總ての事を領地同様にやつて居る日本の國內と同じ考を以てやつて居ります、  
 所が國際聯盟を日本が脱退してしまつたら、あの南洋の委任統治國も取上げられるのぢや  
 ないかしらと云ふ事を心配する人があります、餘計な心配である、平和會議から預つたん  
 であります、國際聯盟は平和會議の後に出來たんであります、是から預つたものを日本が  
 守をして居る、此點に就きましては日本は返すまいと思ひます、愈々日本が返さなんだら  
 アメリカは是をやるか（拳を振上げる）と云ふと、アメリカがやるなら英國もやるかと云

ふと、所があつた南洋の委任統治位の爲に、大人氣ない、そんな戦争はしやしません、若し然しやつて來よつたら日本もやりませぬ、武力で以て委任統治を取返すと云つてやつて來たら相當の兵力を以て之に對抗する事は日本の當然の處置でありますが私はまあそんな事は起るまいと思ひます、然し戦は火事の起るが如くで何時起るか解らない、平和だと云つて居るとバツと戦争が起るから、殊に注目すべきは米國なり英國の態度であるが、然しもう一つ五月蠅のはロシアであります、滿洲を擁護して居る日本としては五月蠅い國であります、乍併ロシアは日露戦争に於てあつた打撃を受けた事を忘れませぬ、五ヶ年計畫とか第二次の五ヶ年計畫とかで國力の恢復を計つて居るが、あの大きな國が兵力を以て治安維持をやつて居る、日本の治安維持は警察の力でやつて居るが、若しロシアが滿洲へ兵を出して日本へ兵を出したら國內に兵隊が足らぬやうになるから國內に火の手が起る、内亂や革命が起る、日露戦争の時でもさうであります、何故もつと思ひ切つて兵を滿洲に寄越さなかつたと云ふと、國內が危いので有ますから、日本の五十萬に對して七十萬位しか持つて來られなかつた、手薄になつて革命が起つたならば外では戦争、内では大揉めと云ふ事を考へて居つた、だから遙かに優勢な實力を持ち乍ら實力が出せなかつた、今日ではソビエトロシアになつて居るが國民はソビエト政府に對して満足してゐない。折があつた

ならば一旗擧げようと云ふ事は普通ロシア人の考へて居る事でありませぬ、何處かで火の手が擧らぬかしらんと待構へて居るからロシアは探偵政策が非常に嚴重であります、政治に對して不平は云へない、若し不平を云へば政府に密告されて首を取られてしまふ、知合つて居る仲でも相手を間牒かも知れぬぞと云ふ疑問を持つて居る、それは持たせるやうにして居るので仲々巧妙であります、何處かに火の手が擧ればよいがと云ふ事を常に考へて居る國であるから實に氣の毒であります。さう云ふ國が滿洲の西北にあるから滿洲とは實にうるさい所の關係であります。

熱河の方の状況はもう時間が餘りありませんから申上げる事を省きますが、最近の状況では略ぼ萬里の長城の線に迄到着したやうであります、一時萬里の長城の上に日本の國旗を立てたやうに新聞にも出て號外にも出たが事實は未だ長城の線は取れて居らぬやうな譯であります、夕刊を見ますと一角を取つたと云ふ事が出て居る、熱河から北平に通ずる入口の所から熱河に向つて非常に堅固な陣地を拵へて居ると云ふ事でありませぬ、若し敵も相當の飛行機を持ち、日本の飛行機の活動を相當に妨害が出来るならば私は今の古北口の北方地區に於きましては上海の戦争地區に於てあつたやうな可成の激戦が起るかも知れませぬが案外逃足のついた敵であるから、上海の時のやうな十九路軍のやうな譯にはとても行

きませんから一寸した事にもピクツとするやうになつてしまふから、古北口を越えて萬里の長城を越えて北平の方に逃げると、張學良が承知しない、逃げるのではないぞと云ふ譯で、同志討をやつとるやうな事です。上海の十九路軍と云ふ奴は案外強かつた、蔣介石が自分の手兵の可成強い奴をやつて、若し逃げて來たら撃つぞと云ふ譯です、後向けば蔣介石向ふ向けば日本から撃たれると云ふので、十日以上も頑張りましたが、つひには戰場に多くの死體を遺棄して逃げたんです、ですから若し支那側が向ふかち逃げて來た奴をすつくり仲に入れて、新たに北の方の線を押へたならば爰に頑強な戦争が起るかも知れないが同志討が始つて居るやうな譯ですからとてもそんな戦争は起るまいと思ひます、兎に角、熱河省全體をとる爲には一月位の日數は要すると想像して居つた所が我軍の實に到れり盡せりの準備と殊に自動車のトラックの活動が非常なものであつたらしい、何百臺といふトラックが兵を満載して向ふ見ずに突込んでいたのであります、自動車で突込んで來られては大抵の奴は周章してしまつて譯なく承德は取れてしまつたらしいのです、承德の方の總司令官であつた所の、湯玉麟と云ふ奴は元々滿洲國を創立する時の創立者の一人であります、自分はその會議には出て居りませんが、自分の代表者を滿洲國を組織するに就ての委員として會議に出させて滿洲を組織すると約束したのであります、その湯玉麟が

愈々滿洲國が出來て日本で云ふならば參謀次長位の地位を與へられて熱河省の大將としての任を負はされて居つたのであります、それがあの熱河省からとれる阿片を以てウンと金持になつて居る、熱河省では阿片の芥子の花の盛りは實に奇麗なものであります、其位熱河省には阿片が採れる、それを採るに就て非常な高い税金を取つてそれが皆湯玉麟の懐へ這入つて居る、財産は實に夥しいものだと思ふ事です。その湯玉麟が何故滿洲に刀向つて來るか、張學良に買収されたかと云ふと湯玉麟は張作霖に恩顧のある人間であるからその息子の張學良にも恩顧が淺からぬのであります、何とかして滿洲を取返さうと云ふ爲に買収したのであります、自分はウンと財産を持つて居る、張學良から買収されて志を變じなければよかつたのであります、金さへ見せたら動く實に汚い人間です、さう云ふ事情ですから滿洲國は可成日本の思ふやうになりつゝあるのです、そこで萬里の長城を取るかどうするか熱河迄は、兎に角滿洲國と云ふものの範圍であります、その國內で討伐をする事は日本の主張通であるが萬里の長城を越えて乗出して北平の方に向つて進み出ると云ふ事は是は日本として考へ物であります、若しそれを思切つてやつたならば今度こそは本當の國際問題が起るかも知れませんが、是に對しては慎重の態度を取るであらふと思ひますが、若し支那の方が何處迄も日本に對して強硬なる態度を以て出て來ると云ふ事になれば

或は長城を越えて乗出す事になるかも知れませんが是も上海に一時出兵したやうなものであらふと思ひます、とても天津を乗取つたり北平を乗取つたりするやうな事は出来んと思ひます、それをやつたならば日支戦争になつてしまふ、只熱河省に於ける反滿洲軍を討伐すると云ふ爲に兵を動かして、長城以南の敵を追拂つておけばそれで良いと云ふ一時的の處置をとるかも知れませんが、それが爲に支那政府に向つて早く北平と萬里の長城との間に居る支那軍を引上げるやうに、重大事件が起らない様にとの通牒が行つたさうでありま、その事柄は今日の夕刊にも現れて居るが、何と云つても〇〇で現れて居るので詳しい事は解りませんが實際的の事は活動寫眞を御覽になつた方がよく解ると思ひます。そこで決論と致しまして、日本の立場として何處迄も當局者がその主義に向つて邁進されてお互國民としてはどうするかと云ふと、國論を統一すると云ふ事が必要であります、一方に於ては先月御相談になつた實行問題これを實行して頂く事で、どうも日常生活に盲滅法の生活をして居る人が多いのですが、出来るだけ他日の準備をすると云ふ腹を持って居れば盲滅法な暗闇生活は出来ない譯であります。

どうか一つ今晚のこの問題をしつかり御實行願ひたいと思ひます。

(昭和八年三月十日御講話)

## 報德會總務所幹事

角谷源之助先生

私は今晚は先月二十七日に賜はりました所の御詔書に就きまして、少しばかり皆様と共に反省をさせて頂きたいと思ひます、どうぞ暫く御辛抱願ひます。

夙に皆さん御承知の事で御座いますが、今回の御詔書は實に容易ならぬこの機會に我々臣民に賜はりましたもので御座いますが、餘程とくと研究もし如何にしてこの上は大御心を服膺すべきかを深く考へて見なければならぬと思ひます、初めの方は御詔書を賜はりました次第をお述べになつて居られますのですから省きまして、その最後に我々臣民を特に御戒め下さつた御言葉が御座います、その點だけを特に考へて見たいと思ひます。

方今列國ハ稀有ノ世變ニ際會シ帝國亦非常ノ時艱に遭遇ス、是レ正ニ舉國振張ノ秋ナリ爾臣民克ク朕ガ意ヲ體シ、文武互ニ其ノ職分ニ恪循シ、衆庶各其ノ業務ニ淬勵シ、嚮フ所正ヲ履ミ行フ所中ヲ執リ、協戮邁往以テ此ノ世局ニ處シ、進ミテ皇祖考ノ聖猷ヲ翼成シ、



普ク人類ノ福祉ニ貢献セム事ヲ期セヨ。

五八

この一段で御座います、初の『文武互に』から『恪循し』迄は、官吏に對して仰せられたものゝやうに思ひます、文官武官は——是はまあ軍人と外交官と云ふやうな風に、文官と武官が、どうかするとうまく調子が合はないと云ふと、一方が一方に干渉すると云ふやうな事になる、よく新聞などにも出て居りますが、やはり多少お互にさう云ふ事があるのであらうと思はれます、そこで陛下が御心配遊ばして、文官武官互にその職分に恪循し——領域が決つて居るから自分の職分に就てそれ〴〵職分に従つてやつて貰ひたい、相冒す事のないやうにと云ふ官吏に對する御戒めであります。其次の『衆庶各其業務に淬勵し』と云ふ、この業務に淬勵しと云ふ是はまあ廣く一般に仰せ下さつた事であります。その次に『嚮ふ所正を履み、行ふ所中を執り』是はまあ時局に就て適切な御教訓で御座いまして嚮ふ所正しきを履み、我々の心の向ふ所常に正しくなければならぬ、どう云ふ事を含めて仰せられたか解りませぬが尠く共かう云ふ事は含まれて居るかと思ひます、今日は利己主義の世の中である、國際聯盟あたりの様子を新聞で見ますと各國それ〴〵利己主義であります、自分の國本位にそれ〴〵意見を立て、日本の國が正しからうがどうせうがそんな事は眼中にない、自分の國が都合よければいゝと云ふ自己主義の塊りであります、日本が人

道正義を主張しても容れられないのは當然であります、そんな事で色々意見があるやうであります、それは外國の事ですが翻つて國內に就て考へて見ましてもやはり勞資の争とか云ふやうな事を、労働者は自分の立場だけの、資本家は資本家として自分の都合のよい方に取計ふと云ふ風であります、農村も都會も、是は畢竟利己主義の衝突であります。

そんな風に各々利己主義と云ふ事は正しくない事であり、尠くともかう云ふ事を御聖旨に含めて居られるので、又差別待遇と云ふ事も、是は日本の國が強くなつて三大強國の、アメリカ、イギリス、日本が國としては強くなつて居るが國民としては劣等國民として取扱はれて居る、自由に移住が出来ない、或は英領カナダ、或は濠洲、さう云ふ英國の範圍に於ても日本人は自由に行く事が出来ない、やはり排斥される、國としては世界の三勢力大強國として認められてゐても日本國民としては支那人其他の劣等なる民族と同等の扱をされて居る、是は正しくない差別待遇であります、翻つて日本の國內を考へて見ましても差別待遇があります、所謂融和問題と云ふ事ですが或は朝鮮人、臺灣人等に對して亂扱などを内地の者がすると云ふやうな、同じ國民でありながら差別待遇をして、一方が一暴な方を輕蔑すると云ふやうな事はない事で國內にもし正しくさう云ふ事があります、向ふ所正しきを履んで居ないと云ふ事になります。其他色々思召の中にあります所の『行ふ

五九

所中を執り』と云ふのは右傾左傾の極端なものは、右でも左でも傾くと云ふのは中を執つて居らぬので國家主義と云ふやうな方から云へばよいやうであります但し傾いて居るのはいけない、暴力に訴へて力でゆくと云ふやうなのは左傾と變らない、合法的でなく、やたらと人を暗殺したり、暴力を用ひる等は左傾と變らない、極めて中庸を得て居らぬので國法に背いて居るものでありますからそれ等を指して行ふ所中を執りと云ふ、左傾右傾共にいけないと云ふ思召であると思ひます。其次の『協戮邁往』是は協心戮力心を協せ力を協せて邁往は勇往邁進を略して二字に約めて居られるのであります、一致協力して進んで行かなければならないと云ふ一つの適切なる御趣旨がこゝに含まれて居ると思ひます、さう云ふ風にして善處して行かなければならぬとの御戒であります、そこで私はその中で最も大切な二つを取りまして反省をしてゆきたいと思ひます。それから『衆庶各其の業務に淬勵し』と云ふのは、淬と云ふのは、いらいと云ふ字であります、勉勵とか奮勵とか云ふのとは違つて、いらいと云ふのは鐵を鍛へます時の鐵を火の中に入れて眞赤に熱し、之を槌で叩いて不純粹のものを叩き出し、水の中で冷やしてその鐵を固める時のジュツと云ふ音が淬と云ふ字なんです。さう云ふ風にして鐵を鍛へる、淬勵とか淬勉とか云ふ言葉はたゞ勉勵と云ふより一層強い意味です、骨を折つて苦しみ勉勵すると云ふ意味であります。

衆庶此際この難局に處して非常の決心を以て勉勵しなければならぬと云ふ御趣旨の御言葉のやうに拜するのであります、お互に業務に淬勵するに就てはどう云ふ心掛で居らねばならぬかと云ふ事に就きましては最近花田先生が鹿兒島からわざわざ『今日暮し』と云ふ事を刷つて下さつて、報徳雜誌『斯道』に出して置きましたからもう御覽下さつた方も多數ありませうが、其中に今日一日が我が一生涯であるとかふ考へて居つたならば誰でも自然と行を慎むのみならず、進んでよい事をするやうになる悪い事をせぬやうになる、なるべく満足の日を送つて後悔せぬやうになると云ふ事を云つて居られる、毎日を有難く喜んで送り、立派な最後を遂げる日であると、今日は愈々死ぬのであると思へば油断も出來ない、明日も明後日もあるからまあ今日は怠けても良いと怠けるのですが今日一日で死ぬ、是が一生涯であると思へばさう云ふ事はない、こゝう云ふ風に今日一日を暮せばこんな幸福なよい暮しはない、自分の生命は今日だけであると云ふ決心で居れば、この花田先生の御教訓の如く、業務に淬勵すると云ふ陛下の御言葉を實行するのに最も大切な心掛が出来るのであります。

花田先生の御教訓の他に佐藤一齋先生の『處世録』と云ふ本がありますがその中にかう云ふ事があります、『昨日を送り今日を迎ふ、今日を送り明日を迎ふ、人生百年斯如に過ぎ

『それはさうです、人生は明日を迎へて今日を送り、そんな事を繰返して居るに過ぎないのですから、それ故によく其の一日を慎むべきです、だから『今日一日をよく慎まざるば醜を身後に残す』一生の後に自分の醜さを残す事になるから今日一日を慎まねばならないと云ふ、佐藤一齋先生と花田先生の『今日暮し』と同じ意味であります、如何にも適切な事であり、さう云ふ風にして行けば、陛下の思召に適ふ事と思ひます。

本年の一月十日に京都府の教化團體の一人として滋賀縣の宮村と云ふ所へ、日本全國の模範村になつて居ると云ふので五十人許りで見に行きました時に、感心しました事は役の村長はじめ吏員が忙しい時には晝の辨當と夜の辨當と二度分を持つてゆく、夜の辨當を食べて十二時一時位迄も事務を執る、天下の模範村になるにはそれ位勉強しなければならぬと思ひますが、其日の仕事はどんな事でもその日にやつてしまふ、明日に残さぬと云ふのが役場の風であります、業務に淬勵すると仰有つたのはさう云ふ意味の事を御要求になつて居るものと私は思ふのであります、それから私は尙之に就て考へますのに、今日暮した今日が命の最後であると思つてその事はその日の中に片付けてやる事は結構な事であり、かう云ふ事も含んでゐると思ふので、自分の死んだ後の明日の準備をしてゆくと云ふ事も今日の務の中にあると思ふのであります、死んだ後で差支へのないやうにと云

ふのが今日の務であると私は思ひます、報徳會がやはりさうです、私は日露戦争後に間もなく花田先生に御目にかゝつたんですが、その後日曜日や休みにはよく御一緒に遠方へも歩いた事もありました、そんな時に、まあこの報徳會もだん／＼盛になつて来ていゝけれども後繼者を拵へて置なければならぬ、報徳會の事業は決して十年二十年で止まるものではない、聖旨を普及すると云ふ事に永久に骨を折らねばならぬ、我々が死んだ後で潰してしまつては駄目だ勿體ない、我々が亡き後も永續されて行くやうに今からやつて置かなければならぬ、それには報徳の中學校、女學校を作る必要がある、そんなものを作る時はお前に頼むぞと云ふ事を私にお話になりました、それはもうすつと前の大正九年頃の事でありました。その頃から前途の事を考へて居られた經費もかゝる事であるが自分も前途も短いからわしの最後の事業として學校を作りたいと云ふ事で、細々ながら皆様の御援助により學校が出来ました、今日は今日限りの命であるから明日の準備を、死んだ後の準備をして居る譯であります。

模範村と云はれる様ないゝ村は大抵大多數はかうなつて居ます、天才的の珍らしい立派な人格者が出てその人の力に依つて非常に村がよくなつて来る、天下の模範村になります、不幸にしてその人が亡くなつた時には見る蔭もない哀れな事になるものがあります。

静岡縣の稻取村は日露戦争後天下の三模範村として表彰された事がありますが、行つて見た事もあります。今は悪い村になつて居ります、村長が死に小學校の校長も死に、後継者を作つて置なかつた爲に、準備をして置かなかつた爲にさう云ふ事になつたんですが、宮村はさうでない、役場の吏員は五、六人しかないがどうして之を採用するかと云ふと村會を開きまして村會議員が満場一致に依つて青年の中で最も優秀なる、眞面目な、是ならば此村を預けてもよいと云ふ模範の青年を選び——大抵青年團の團長が選ばれますが——村中の青年が満場一致で役場の吏員に、書記に採用するのです、それが五年十年十五年と役場に居つて村長の膝下で村長の候補者として養成される、一人缺員が出来ると村中で最も優れたものを決議して採用し、役場の事務を教へ、村を率ゐて行く事、とり治めてゆく方法をよく練習させる、いつ村長が止めても村長の候補者が幾人でも揃つて居ると云ふ風で

昨年十二月、當時の村長が年を取つて止めたので助役が村長になつて、ちつとも差支が起らない、こう云ふ模範村ですから何度村長が變つても大丈夫、宮村は實に堅固な模範村であります、跡が絶えない、臺なしになつたりする事はない、うまく出来て居ます。業務に淬勵すると云ふ以上はそこ迄、即ち死んだ後の事迄も考へてやると云ふ風に忠實でなければならぬと思ひます、宮村では役場のみでなく青年團なども結婚の爲に非常に

費用がかかるので、青年團で決議して、質素にやる事に申合せて勵行して居ります、式服等も五種、是迄は拵へなければならなかつたのを一枚で宜しい、又披露の宴會は是迄五圓十圓二十圓と使つて居つたがそんな馬鹿々々しい事はない、不都合であると云ふので青年自ら決議して、二圓三圓五圓としてその範圍より出る事は出来ないと云ふ決議をして、すつかり勵行されて居ります。

それから處女會では家政の調査をして居ります、自分の家に一ケ年の入用を、是は何々の費用と費目を分けまして、交際費には是だけ入るとか、毎月の費用を計算しまして結局年末に是だけ貯金が出来ると云ふ事を自分の家に就て調査して居ります、それがやがて嫁に行つて豫算生活が出来ると云ふ事と準備して居りますので、さう云ふやうな事は餘り何處でもやつて居らぬと云ふ事です、處女會などで將來の爲にさう云ふ事をやつて居る、又婦人會も實に感心でありまして只小學校時代の子供だけを婦人が親切に色々と生活すると云ふ事ではなく、我々の後繼の青年だから、青年の行末を見届けなくてはならないと云ふので、青年訓練所の査閲があつて隣村でやるんださうですが、宮村の青年訓練所から行つて聯隊から教練の査閲があつたのです、宮村の婦人は残らずその査閲を見學に行きました、我が村の後を繼ぐべき我々の青年はどんな眞面目さで教練をして居るかと云ふ事を見届け

に行つたのです、査閲官が、今迄在郷軍人方の見學はあつたが婦人は初めてだと云つて驚いて居つたさうです、宮村の婦人は眞面目で我が村の將來の爲にそこ迄考へてくれて居るのかと査閲官が感激された事がありました、我が村の後繼の行末を心配して隣村迄わざわざ見學にゆくと云ふやうな事迄やつて居るので、さう云ふ風に明日の準備をすると云ふ事が今日の務として我々は考へなければならぬのであります。業務に淬勵すると云ふ事はかやうな譯で我々は今日限りの命である、明日は死ぬるのであると云ふ覺悟で今日の務として準備をして置くと云ふ事が大切だと思ひます、私はそう考へるのであります、それから最後に協賛邁往と云ふ事ではありますが、大勢の人間が力を協せて心を協せて行く事は今日の時節に最も必要な事であり、それで陛下が御言葉を賜はつた事ではありますが、この協賛と云ふ事に必要な箇所は心を統一すると云ふ事でありませう、心を一に纏めると云ふ事が協力一致して行くのにどうしても必要であります。

何か中心を設けて大勢が纏まつてゆくと云ふ事でなければ、協力は出来ない、一致は出来ない、處が宮村は出来て居ります、其はどう云ふ事かと云ふと、十戸毎に隣保會と云ふ會を作つて居ります、報徳會と同じ様なもので寧ろ戸主會と云ふ様なもので、戸主が集りますが、村中を細く分け三十の隣保會が出来て一の隣保會は十戸から成立つて居りまして

十戸の戸主が集つて毎月一回寄ります、廻りばんこに各々の家で区域内の戸主が集つて隣保會を開くのです、その時に初めにどう云ふ事をするかと云ひますとまづ第一に伊勢の大神宮様に向つて遙拜を致します、國の御先祖に御禮を申しまして、其次には東の方、皇居に向つて遙拜を致し、其次には氏神様に向つて遙拜をする、地方の御先祖に報徳敬神の心を捧げる、それが濟んだらば御佛壇の前に坐つて——滋賀縣は一帶に本願寺の熱心な信者であります——立派な御佛壇がありまして、その前に戸主が坐つて家の御先祖に對して御念佛を唱へ御勤めを致しまして御禮を申します、國の御先祖、陛下、其の村の御先祖、とチャンと順々にさう云ふ風に御勤めを致します、つまり御先祖の恩を忘れないやうにするのです、次に我が國家の中心たる皇室に對しまして皆誠を致しますと云ふその精神で致します、御先祖の御恩を尊ぶと云ふ事に統一されて居ります、それが濟まなければ相談をせぬのですが、君ケ代を報徳會で歌ひます意味と形は違ひますが同じ事であり、後で種々の實行上の協議質問検討や講演などとさまざまの事をやりまして随分夜更ける事があります、其時は煎豆を嚙りながら膝を組んで皆が如何にも睦しく話をすると云ふのであります。是がこの村をして模範村とした根本の原因であります、それが宮村をして物を言はせて世間に立派な村だと云はれて居る原因であるやうに思ひます。精神を統一すると云ふ

事が大勢の人を纏めるのにはどうしても必要であると思ひます、報徳會もやはり我が皇室を中心として御勅語を中心として、老若男女貴賤貧富皆精神が纏まるやうに、人心の一致結合を圖るやうに出來て居るのであります、宮村の隣保會は形は違ふが、報徳會と同じやうなものであります、宮村は戸主だけ寄るのでありますが、戸主だけ寄つたんでは男ばかり、それはいけません、どうしても男も婦人も年寄も青年も處女もすべて報徳會に集ると云ふやうに、その點宮村が改良されたら一層よくなると思ひます、さうすれば初めてすべての事柄の意味がよく徹底し、御家内の間の融和がとれて心持が融けあつて参ります、戸主だけがやつて居るから實に惜しいものだと思ひます、若し報徳會をされて貴賤貧富、老若男女皆集れば融和徹底、統一が出来るからそれに越した事はないので、さう云ふ意味から報徳會は本當に陛下の仰せられるやうに協賛邁往、心を協せて行く事が出来るので、報徳會の組織方法に寄つて行くと云ふ事は重要な性質を持つて居るので、我々はお互に益々報徳會を務めてゆきたいと思ひます。それで陛下の思召を實行致しまして宸襟を安んじ奉るやうにしなければならぬと反省を致して居る譯で御座います。

今日は些か御詔書の大體に就きまして、自分の反省をさせて頂きました。御謹聽を頂きまして有難う御座いました。(終)

(昭和八年四月十日御講話)

## 報徳會總務所幹事

猪谷不美男先生

誠に久しく御無沙汰致しまして相すみません、又出まして御邪魔致します、どうぞお樂になさいまして……、

先日から今月の初に掛けまして花田先生が山口縣を巡行していらつしやいまして丁度今月の二日三日の兩日に山口市で報徳會組織の相談會を開いて、實は花田先生が他にもお約束があつて、其處へ市の方から申込んで来たといふので私が二日間だけ山口市に参りまして報徳會の組織に就いて勧めたのであります。御承知でも御座いませうが山口縣は報徳會の日本中で一番盛んな所で、殆ど三千を越して居りました、殆ど全縣下に出來て居つたと云ふ事でしたが、だんく衰へて來ましたので非常に心配して居りました所昨年以來知事さんが骨を折つて——實は郡役所がなくなつて以來衰へまして、それ迄はずつと續いて居つたのですが、それでも半分位凡そ一千五百位はやつて居りました。この非常時に於

て盛んにやらうと云ふので、兎角この都會の地は報徳會が出来難いのです、他は出来て居るのですが、山口市や下關市や かう云ふ所が頗る出来難いのです。

其處で今度は是非山口縣全體に組織させやうと云ふので市長を初め縣廳も世話をやきまして大分やりましたが、どうも私が二日参りましたけれども私の不徳の致す所遺憾乍ら市の方が集りが悪いのです、訊いて見ますといふとどうも何の講演をしても何の會をしてもその通りであります、市の中央部の大きな商人や有力者の居る方が集らぬ、そこで新に今度は市に致しました爲に聯合しました。農村の方の部落は今迄もよく出て居りましたが次第に澤山の人が集りまして盛んにやつて呉れるやうになりました、よい部落の方が甚だ集りが悪いので御座います、其前から花田先生から今度行つたら一つ何故山口縣がこんな盛んになつたかと云ふ原因から話せと云ふて命ぜられて居りましたので、其處で約三時間位づゝ話しまして、後に有志を集めまして大いにやつて参りました。

これは多分御承知でもありませんが、先づ山口縣即ち防長二州に於て尊王攘夷を唱へた大將は吉田松蔭先生であります、この頃この吉田松蔭先生の殉國教育といふ本が出て居りますが、吉田松蔭先生は明らかに松下村塾に於て國に捧ぐる命ありと云ふ教育をせられたのであります。

その結果があつた小さな松下村塾から出た防長二州の御維新の有力者殆どが松蔭先生の門下生であります。御承知で御座います。吉田松蔭先生と乃木大將とは同じ縣、同門であります、幾らか御親類でもあります、所が乃木大將は年齢の違ひもありましたし、吉田松蔭先生がお早くお死になつたのもその所爲でせうが顔を見事な事なかつた、玉木文之進先生は吉田松蔭先生の叔父様で御教育申した人でありました、そんなわけで吉田松蔭先生は甥でありますから叔父様の後をお繼ぎになつた譯であります、其處で乃木大將は實は十五六の時に學問がしたいと云ふので御家庭を無斷で飛出して玉木文之進先生の所へ行つて到頭その教育を受けて人となられたと云ふ事でもあります、丁度吉田松蔭先生も乃木大將も玉木文之進先生の御教育を受けられた譯であります、それで乃木大將が玉木家の教育を受けられた時にはいつも吉田松蔭先生を手本にせられて『寅次郎が居つた時には斯うした、寅次郎は斯う云つてこんな風に我々の教へを守つた』と云つて、お前は逢へなかつたが實に感心な男であつたと教へられたのであります、もつとも自分の一番大切な甥で、一つしつかり日本の爲に盡させやうと思つて居られた人が早く死なれましたから力を落されて、そして乃木大將を之に替らせやうと云つた御考へで激しい御教育でありました様です。そこでどういふものを下さつたと云ひますと『士規七則』と云つて、士の心掛として書いたも

のを拵へた。——それは今も残つて居ります——それが吉田松蔭先生が外國へ行かふとして幕府から捕へられまして毛利家に預けられて獄にはいつて居られました際に、玉木文之進先生の御子さんの彦輔と云ふ人があつてその男兒が元服なさつた、自分の師匠であり叔父である人のお子さんの彦輔さんの元服のお祝ひをしようと思つても、獄中にゐて出来なから、そこで吉田松蔭先生は從弟が立派な人間になるやうに心得として何か一つ書かうと云ふので、この士規七則が出来ました、初めは塵紙に書いてありまして『私は貴方の御子様である彦輔殿が元服をする事になつたお祝をしたいが、獄中で思ふに任かせません、自分の精神をこめて士の守るべき士氣七則と云ふものを拵へました、之を御祝に贈りたいと思ひます』かう云つて獄中からどう云ふ連絡があつたものか、文之進先生の所へ差上げました、其處で文之進先生がそれに朱筆を入れて大分お直しになつてお返しになつたのをそれを獄中で綺麗な紙に御直筆でお書直しになつて、玉木彦輔さんと云ふ從弟の人の元服の祝に上げられたのが残つて居りますのであります、あれは自分の從弟を立派な人間にする爲にお拵へになつたものが今に残りまして、長州の人の如きは殆ど御維新前後の者は畏れ多いが丁度今日の御勅語を尊崇する位に尊んで居つたと云ふのであります。

松下村塾には士規七則が板に彫つて掲げてあります、これは吉田松蔭先生が死なれた後

にそれがたつた一つしかないので、多分それが彦輔君に贈つたものであらうと思ひます。楷書で書いたのが一つしかない、是は門下の人が先生の唯一の精神の籠つた大切なものであるから是は一つ大切に保存して、さうしてその文字だけを木に彫つて掲げようと云ふでしたが、又さう云ふ事では魂がはいらぬ、書いたものを仰ぎつゝ修養せねばならない、その文字だけを残しておいて何になるかと云ふ者もあつて、結局吉田松蔭先生の書かれたのをそのまま木に張付けて、額その物を先生とも思つて仰がうと云つて皆が守つたと云ふ事であり、松蔭先生の御教育を受けた人はその位の眞剣さがありました。其處で乃木大將が玉木家へ參られた時に色々お話がありまして、その時に幸ひにして松蔭が獄中で稿を起して、それにわしが朱筆を入れてやつて塵紙に書いたものでこんな風になつてゐるが是は確かに松蔭が獄中から自分の從弟に對して贈つたもので、お前が松蔭に逢ふ事が出来なかつたのは遺憾であるが、是をお前に遣ると云つて下さつたものらしいのです。

それで乃木大將は非常に感激して、肌身離さず持つて居られたんですが、是に就ては二三遍もお話を聞きましたが、松蔭先生のお書きになつたものを、玉木先生の家にいらつしやつたのだから持つていらつしやいましたでせうと云ふと『實は大切のものを貰つた、私が十六の時から瞬時も肌身を離した事は無かつたが、十年の戦役に二月二十三日に軍旗



を失つた、それから一、二日経つた後に敵に圍まれて馬は撃たれ、落ちた所を向ふの強い奴に組付かれてどうする事も出来ず、幸ひに川があつたから、丁度舊曆の二月二十四日頃だつたが思ひ切つて両方から抱き付いてゐるのを抱きしめてどぶんと飛込んだので、如何に強い奴でも寒い事ですし苦しいからやつと放した、それで這上つて逃げて漸く捕へられずにはすんだが、びしよぬれで二、三日の間と云ふものは、濡れた儘のを着て駆けた事もあつた、上着を脱いで干した事もある、さう云ふ時に何でも内懐の中に込いつてゐたから従者か何か拾つてしまつたのか、戦争が片付いて見たら一番大切なものが失くなつてしまつた、ほんとに残念であつた、つまり松蔭先生の士規七則が身代りになつたやうなものだ十六の時から十年の戦争の時まで、肌身離さず持つて居たものが、軍旗をなくした時の戦争で夢中になつて居つた間に失なつた、惜しい事をした、どの位尊いものか知れぬのにと始終話されたのを聞いて居りましたが、私は實に有難いと思ふのですが、是は乃木大將を拵へてゐる所謂殉國の精神と云ふものは是から受けていらつしやる。

お子様の勝典さんが二十五になつた時ですが『今日は軍人には御勅諭があり、御勅諭があるから宜いが我々共の若い時には士規七則と云ふものを大切に實行したものである、お前も年頃になつたから山口縣の先輩はかう云ふものを残して、さうして我々縣人の爲に指

導の目標を拵へて呉れた』と云ふ事を云つて修養の足しにせいと送られたお手紙の草稿が残つて居ります。さう云ふ具合で乃木大將は松蔭先生の士規七則と云ふものが基になつてあれだけ立派な人が出来たと思ひます、一面には當の山口縣の人が知らなんだやうでありますから私は行つて話をしました、貴方がたは何が基になつて報徳會が出来て居ると思ひます、何に依つて山口縣だけ他の縣と違つてこの報徳會を奉ずる人々が多いかと云ふ事をよく考へて見て下さい、貴方がたが知つてゐる通り、乃木大將はどうであるか、松蔭先生は又志訓と云ふものを残していらつしやる、たしか松下村塾にお詣りしますと、志と云ふ字を楷書で書いて——私も初めは知らなかつたんですが、花田先生が仰有るには、自分は報徳會を拵へるに就いて種々のものに據つたが一番據るべきものは吉田先生の志訓である『天地大徳、君父至恩、報徳以心、報恩以身、此日難再、此生難復、此事不終、此身不息』かう云ふ教へがあります、私は之を見て非常に感激しまして、如何にもこの精神を以て進まねばならないと云ふ事から、報徳會と云ふもの之から採つたのだとこのことでした。徳に報ずるに心を以てすると云ふ事から採つて來たので、色々の言葉があるが是から採つたのだ、要するに私は教へを受けた事もなく、又郷里を同じふした人でもないが、吉田先生の御志に非常に感激をしたので、つまり報徳會は志訓と同じ意味の事をやつて居る、かう云

ふ事を山口縣の人が知らぬやうでありますから、今度行つたら乃木大將のお話をするより吉田松蔭先生のつまり遺志を繼承してやつてゐるのだと云ふ事を言つたら、山口縣のものが目が覺めるだらうと云つて伝付られましたので、そこで今度はそのお話をしたのであります。

御承知の如く桃山の報徳會の會堂が出来まして、石を寄附して呉れた人がありまして、門を拵へた時に『天地大徳、君父至恩、報徳以心、報恩以身』と二本の柱へそれが書かれた時に、私はさうすると是は吉田松蔭先生の志訓からおやりになつたのだと伺ひました。かやうに貴方がたの國の先輩はこんな立派な考を以て御維新をやつて下さつたんです、他の縣よりもこの數が三千と云ふやうな風であるのも、さうなつたのはやつぱり村田清風先生や、玉本文之進先生の教へがすつとはいつて居つたから出来たんであらうと思ひます。それにお膝下である一番の中心地である山口の人が、さう云ふ事でどうなると云つてお話をすると共に、御承知か知りませんが、吉田松蔭先生がいよく刑せられると定つてからお死になる一週間前に、入江九一と野村靖と云ふ、是は兄弟ですがこの二人のお弟子に遺書があるんですが、それから考へますと實に吉田松蔭と云ふ方は先見の明らかな人であつたかゝ解ると思ひます。これは私は此頃になつて知つたんですが、どう云ふ事かと云ふと

その遺書の中に尊攘堂と云ふ事が書いてあります、皆さんも御承知の事と思ひますが、京都には品川彌二郎さんが發起されて尊攘堂と云ふものが出来ました。是は御維新前後に、尊王攘夷の爲に命を失つた人々の遺墨を集めて之を御祀りをしたのが、今では大學に委託してしまつたんですが、是は吉田松蔭先生の精神でやつたんであります、私は品川彌二郎さんがあゝ云ふお人でありましたから、自分と一緒に國事に奔走した人々の遺墨を集めて來る人に感化を與へるやうにやつて居られたのかと思ひましたが、さうではなく、後に吉田松蔭先生の遺書が水戸から出て來て今云つた入江九一、野村靖とに宛て、獄中で書かれた死なれる一週間前のお手紙に、自分は尊攘堂と云ふものを拵へて大いに學生を教育するつもりであつたが、乍併とてももう俺には出來ない、既に刑に處せられると云ふ事が解つて居られたのでせうが、お前達兄弟二人に頼んでおきさへすれば誰かゝやつて呉れるだらう——入江は獄に這入つてゐまして後に死にましたが——どうかお前達二人が他の色々な人達と一緒にやつてくれ、どうかして日本の國の將來をしつかり昔に返して、よい世の中にする爲には、どうしてもこの殉國精神即ち身命を擲つて國に盡すと云ふ精神を養つてゆかなければいけない、それが爲にはどうしても私の考へでは、尊王攘夷の爲に身を忘れて國の爲に死んだ多くの人々の靈を、京都に祀つて尊攘堂と云ふのを創立して、それ

に附屬の大學と云ふのを創らふと云ふので、つまり尊攘堂の附屬の大學を創立し、さうして諸國から講師を集め、藩のある時分であるから、藩から偉い人を集めて澤山死んだ志士の精神を以て、殉國精神を以て學生を教育してゆけば我々共が死んでも、かう云ふ人々が後を繼いでやつて呉れるから日本は必ず立派になる、俺はやるつもりであつたけれども、禍に罹つて死ぬからお前達は年も若くしつかりして居るから、水戸に某と云ふ志士がある是も今は牢に這入つて居るが、是は殺されるやうな事はない、それを一番の力として拵へろ、尊攘堂を拵へるだけなれば幕府も許さぬと云ふ事はあるまい、學校の方は仲々容易には許すまいが、幸に朝廷の方では幕府が喧ましい事を云ふにも拘らず學習院が出来て居る開校の時にお公卿さんも平民もみんな行つて所司代なども其處へ列席して居る、あれは朝廷がお拵へになつて出来て居る、あれを擴張して、精神は尊攘堂を基として拵へると云ふ長い手紙であります

實に至誠は神の如し、至誠の人であるから先が見えたので、殉國の精神を以て教育しなければならぬと云はれたのです、若しもこの精神が御維新になつた時によく教育の制度を人々に傳へて居ましたなれば、今日のやうな憂ふべき事にはならなかつたらうと思ひますこの手紙の入江と云ふ人は死んでゐますが、野村さんはどうなつたか知りませんが、品川

彌二郎さんが水戸の志士の家にあつたのを見て、是は丁度明治二十年一月十日ですが——先生が仰有つたやうに外國の制度を入れてしまつてあの時分は西洋を尊崇する時代であつたから——大分骨を折られたらしいが仕方がないから自分一人で僅かに尊攘堂を拵へて年お祀りをして其處へ來る人に感化を與へやうとしたものであります、あまり大した効果はなかつた、それが御維新になると早く西洋の文明を採入れなければならぬと云ふので百般の制度を採つてしまつたんです、日本精神はみんな持つて居るんだから、形は何處のものも採入れてもかまはぬと云ふ事であるが、それで一番に入れたのがフランスの制度で次には米國の制度を入れたのです、私は實に残念な事をしたものだと思ひます、同じ外國から入れるにしても、せめて我國に少しは似た所のある立憲帝國である所の英國の制度でも採入れたら、今日のやうな有様にはならなかつたらうと思ひます。

而かも英國の教育制度はどうであるかと云ふと實に我國の制度によく似て寺子屋制度であります。初等教育は殆ど官公立はなく私立の寺子屋式であります、三十人五十人位を集めて學者、宗教家と云ふやうな人がやつてゐるので自然にさう云ふ特殊の人々の人格が子供に傳つてゆく、英國には紳士道がある、どうも仲々人柄が高いと云ふ事を云はれるのは此所にあると思ひます。

兎に角萬世一系の天皇を頂いて居る我國へ、フランスの制度を採入れたと云ふのはどう云ふ考へで入れたのか、英國の制度を入れたならば今日の様な事にはならなかつたかも知れぬと思はれます。皇帝を斬罪に處してそのあとが革命になつた、ナポレオンが立つたり潰れたり到頭共和政治になつた、さう云ふフランスの制度を入れたのはどう云ふ考へであつたでせう、今云ふ吉田先生の殉國精神と全然反對の制度を入れて居る、國體がどう違ふが、たゞ制度が完備して居るからと云ふのは、私は考へて見てもわかる非常な間違だと思ひます、それがいけないと云ふので今度は米國の制度を入れた。

アメリカは殖民地で新しい國だから教師の数が少くて澤山の人に教へると云ふ形式で、共和國であり、しかも聯邦制度になつて居て僅かに三、四百年位にしかならない制度を、神代以來續いて居る日本に入れて今日の様な思操の混濁せる憂ふべき時代となつたのは當然であります、どう云ふ一體その時代の人は考へてやつたのか、靖國神社を中心として附屬の大學を拵へる、さう云ふ考へで居つたならこんな事にはならなかつたでせう。

いろ／＼さう云ふ事を詳しくお話し致しました、山口市であとで有志を集めて話して見ましたが、非常に感激しまして、花田先生がさう云ふ吉田松蔭先生の志を承繼して、やつていらつしやると云ふ事は初めて承つたのでありますと云ふて、あなた方は本家をちやんと置いてやらんと云ふ事はない、だから山口縣には難波大助のやうな者が出てくると云つて悪口も云ひましたが、實に吉田松蔭先生は偉い人であります。

乃木大將の全人格は松蔭先生の反映であるとも云へませう、亦我が花田先生の如き一切自分をお忘れになつて駆けまはつていらつしやると云ふが如き、決して表には出てゐませんが吉田松蔭先生と同じ殉國精神が、悲壯なる御決心がおりになる、七十餘と云ふ御高齢であらせられて一日に三回四回と云ふ講演をお厭ひにならない、無理をしても思ひもせられない、實に尊いものです、そこに松蔭先生の殉國精神が傳はつてゐるのです。

之に習つて我々もやつて行かなければならぬと思ひます、まだ私共には七割八割位は日本精神が残つてゐますから、國の爲君の爲には事ある時には死んでもいゝと云ふ決心があります、まづ寧ろ悪くなつて居るのはどうも上の方、中以上の階級に、一體ならば手本とならんければならぬ階級の人に間違つた者が居る、田舎の人の中にも又都會でも低い階級の中にこの精神がはいつて残つて居る、そこで山口縣の如きも中央の一番金を持つて居る商人さん役人さんの居るやうな所はまるで報徳會であらうが何であらうが出て來ない、そんな事は解つて居ると云つて出て來ない、それで日常どんな事をやつて居るかと思ふと人格的には全然零で、情ない事をやつてゐると私は思ひます、黒井、湯田など、云ふ所は

昔から評判のあまり良くない風俗の良くない所ですが、其處らあたりから澤山に来てつまらぬ話でも聞いて歸ります、却つて中心の人が集らないと、しつかり話して來ましたから多分山口も良くなるでせう。私の話を聴くよりも字部の炭坑へ——炭坑になつた爲に村から市になつた所の字部は二百二十三の報徳會がありますが、あそこへ行つて御覽なさい、どの位あそこの支配階級の人がなごやかにやつて居られるか解ります。

國吉と云ふ篤志家がありました、村を統一せねばならぬと云つて修養會を拵へてゐた所が、花田先生が行かれて市になる前に會が出来て居ました、米騒動があつて家を焼かれて三十人位死んだ時に、花田先生がすぐ炭坑へ行つて坑夫を集めて報徳會のお話をして基礎の固い今では立派な會になつて居ります、さう云ふのを御覽になれば報徳會はどうしても作らねばならぬやうになりますと云つて、市の方から主なものを集めて、行つて來なさいと云つて置きました。都市には職業が違つてゐるとか色々な關係で集り難く仲々出來難いのです。報徳會ばかりでなく教化と云ふやうな事に就てはとも都會地は振はぬのがどうかと云ふと危険な所、その必要のあるのは都會地で色々な禍が起つて來るのです、世界中何處でもさうです、困つたものであります。かやうな時代に大阪の市中に於て此方の報徳會は私共のやうな餘り大したお爲にならぬ者の話をお聴き下さいと云ふ事は有

難い事です、どうかまだく大阪市中の工場と云ふやうな所には大部分出來て居りますが一般市民の間には殆ど報徳會のある事を知らぬ人が多いから、皆さんの御骨折を願ひまして我が報徳會の精神、即ち御勅語を實行すると云ふ事に國民が一致しませんければ何しても駄目だと思ひます。俺さへよければと云ふのでなく、自分の仕事を自分が金を儲ける爲にやる、樂をする爲にやると云ふ考へでなく、君國に盡す爲にすると云ふ風になつたら同じ仕事をするにも違つて來るのであります。其處へ行くには御勅語によつてやらなければならぬ、今度の滿洲事變の如きも、日露戦争の時分に横暴なロシアを討つたので大分支那人も歸服して居つたんですから、支那人を虐待せず、もつと對等のものと思つてやつて居たなら、生命線なんかはとうに日本のものになつて居つたと思ひます、花田先生もどの位骨を折られたかわかりませんが、無理して取上げたりするから今日のやうな事になつた、いゝ人が行つて居つたらこんな事にはならぬのに澤山の人類を失つて此儘進んでゆけばどうなるか解らぬが、日本の思ふ通りに行つたら支那人はどうなつてもかまはぬと云ふやうな事では、元の通りになつてしまつて死んだ者は損するだけです。

人間の道を以て交つたり統治したりしないからこんな事になつたのです、御勅語を行はぬ者ばかりが行つたんですね、是は……花田先生があらへゆかれた時、滿洲義軍に使つ

て居つた支那人が日本人はかうだ、あゝだと云つて花田先生の云ふ事などきゝはしないので、どうしても報徳主義を以て自分でおいでになると云ふ事でありましたが、皆んなもそれはお止めして一番若い、殊に軍人であり非常に報徳會に熱心な人である松本幹事があちらへ参りまして、やつて居りますけれども、未だ仲々一人位ではとても難しい、滿洲へ來る者もみんな正しい人は行きはしません、行つてぶつたりして來ようと云ふやうな者ばかり、それを防ぐのに掛りきりになつて居らねばならぬと云ふ事であり、武藤さんあたりの仕事は、さう云ふ仕事が一番の仕事であります、朝鮮人の如きは非常に従順なおとなしい民族であつて、少し可愛がつてやれば、夙に日鮮融和が出來なければならぬのにあの通りであります。向ふへ行つて居る者が何か良い事をしたと云ふと、日本人がよい事をしたと云つてびつくりするそうです。

内地の人が小金を貯めて日本へ歸つてくればよいが、みんな高利貸になりどんな利息で貸して居るかと云ふと七朱、月ですから八割四分と云ふ利息、日本人はみんな悪人だと思ふのは無理はありません、憲兵、學校の先生、巡査が悪人だと思ふのは無理はありませんそれと同じ事を又滿洲でやるんだつたら、斯様な有様では又死損をするだけで實に馬鹿げた事であります。國民は心を立て直して人の道を以て進んでゆかなければなりません。

兎に角解り切つた事ではありますが、俺さへよければ人はどうなつてもよいと云ふのでは両方が倒れるの他はないのであります、同じ行つてやるならば人の爲にならふと云ふ考へで、御勅語を體得する事に骨を折らねばなりません。精神の立て直しを日本人がやらなければ駄目だと思ひます、吉田松蔭先生等は僅か三十で死れた人でありますが、すつかり先を見透して居られた、殉國精神を養つてゆかねばいけないと云ふ、さう云ふ將來の爲に大學を靖國神社を中心にして附屬の大學を作り殉國精神を養はうと云ふ、如何に偉い人であるかと云ふ事を多少調べましたので、それで實は一層有難いと思つて居る次第でありますとりとめのないお話を致しました。(終)

(昭和八年五月十日御講話)

## 報徳會總務處幹事

藤田武二先生

八六

只今御紹介を頂きました藤田で御座います、今日は時の記念日でありまして夫れく時  
間の尊い事を彼方此方で宣傳して居りまして、報徳學校でも今日は 天智天皇様の御陵  
に參拜をしたのであります。それにまた花田先生のお生れなされた日でありますから、總  
務所で赤い御飯を炊いて、先生は此頃鹿兒島に御歸りでありますから御寫眞を出しまして  
御勅語の捧讀をして先生の御祝をしたのであります。先生からは度々報徳會から出て話を  
する場合には趣旨の御話をされる様に、變つた話をしない様にと云ふ事を聞きましてよく心  
得て居るのであります。花田先生はこの話を三十何年間、何萬遍と繰返して居られるので  
あります。今晚はそんな關係でよく御承知の事ではありますが一部分だけを御話さして頂き  
ます、どうか皆様方御樂に御願ひ致します。

報徳會の趣旨目的は只今御捧讀になりました教育勅語の御趣旨を奉體致しまして、日本

國民として朝な夕なに守らねばならぬ、行はねばならぬ人間の道を、私共やあなた方が踏  
み行ひまして漸次より良き人間になるやうに、日本の爲に此世に於きまして生れ甲斐のあ  
る幸福な結構な世渡りをして行かふと云ふのであります。さてどうすればお互が幸福な結  
構な世渡りが出来るであらうかと云ふ事になりますと、それく人の思惑が違ふのであり  
ます、今日のやうな有様ではお金さへあれば幸福な世渡りが出来るかと百人の九十何人かは  
答へるでありません。

果して人間がお金だけあれば幸福な安心な満足な世渡りが出来ませうか、世に時めく富  
豪の夫人は夫婦共稼の労働者を見まして、一度でもあんな世渡りがして見たいと嘆息され  
たと云ふ、即ちどんなにお金があり地位や學問や位がありましたも、決して満足し安心し  
て結構な世渡りが出来るとは限らないのであります。何故かと云ふと御互は身體だけで出  
來たものではなくて、もつとく大切な心を持つて居ります。目には見えませんが實に大  
切なものであります、どんなにお金があつて贅澤な暮しを致しましても、どんなに學問  
がありましてもお互が何か悪い事をして御覽なさい、人の悪口をするとか夫婦喧嘩をする  
とか、忽ちその日の仕事は手に付かず、美味しい食事も進まず、夜も眠れない、是は全く  
心がある爲に我身が苦しむのであります、満足して行くにはお互が悪い事をせねばかりで

八七

なく進んで善い事を致しますなら、別にそれは誰も見て居る者がなくても氣も晴々と、身心共に慶びに満つるものであります。

それで昔から神様でも佛様でも、善い事をして呉れ、悪い事をして呉れるなと口を極めてお勧め下さるのは是が爲であります。兎角目前の名利に捉はれまして男も女も金のある人も地位や學問のある人も精神修養をせぬから、お金を持ちながら、地位や學問がありながら難儀、苦しみをして居る、哀れな衆生、氣の毒な人民と云はれても致し方がないのであります。何事でも物には本末輕重があります。事には終始緩急があります。その最も基になる急な事にお互が力を入れて行かなければならぬと思ひます。あの大阪の城も、其他のビルディングも、立派な建物は何が基かと云ふと目に見えて居る所の、あの屋根や柱が基ではない、目に見えぬ礎が基であります。お互が何が基かといふとお金でも地位でも學問でもなくして精神道徳が一番大切であります。この修養を怠つたならばどんなに容色が勝れお金があつても、人間は幸福な安樂な世渡りは出來ないのであります。孔子様も『徳は本なり、學は末なり、この本亂れて末治まるものあらず、天子より庶人に至る迄身を修むるを以て本とす』と申されました。身を修めなかつたならば家を齊へ天下國家の治まる理由もありません。

明治大帝の『おのが身を修むる道を學ばなむ賤がなりはひ暇なくとも』と仰せられました。明治大帝の御聖徳は彌が上にも高く、六千萬國民の私共を子の如く思召され『罪あらば我を咎めよ天津神民は我身の生みし子なれば』と云ふ罪咎をお受け下さらふと云ふ有難い思召であります。

四拾餘年前に賜はりましたお勅語は、自分さへよければよいと云ふ我儘勝手な事をするのを豫め御心配遊ばされまして、行末國民が必ず苦しむであらふから、どうかしてこの國民を救ひたい、助けたいとの有難い、尊い思召であらせられたのであります。これは實に皇祖皇宗の御遺訓 天照大神様より世々の天子様の御教へであります、どんなに國が開けましても世界何れの國に施しても、神からも佛からも、古今に通じて謬らず悖らぬ、實にこの教へは國民も朕も亦之を一緒に共に拳々服膺せん事を冀ふ——どうぞ之を行ふて呉れよ、守つて呉れよと勿體ない御言葉さへも添へさせられて、御勧め下さいました御聖勅であります。この有難い御勅語を身に受けながら四十何年間、國民は我身に行うて居らぬばかりでなく全く間違つて居る、學校へ是は給はつたものであなた方の子供衆や孫さんが儀式の時に謹んで聽いて居ればよいかの如く、學校を卒業したもの、大人にはもう關係はないかの如く考違ひをして居つた爲に今日のやうに思想が悪化し、陛下に對しても申譯



のない、國民道徳が衰退して來ましたのも、よつて來る所の原因が其の結果になつて來たのであります。

それで御勅語を給はりました翠年でありましたが、豫て示しておいたが其後の狀況はどうであるかと地方長官に御諮ねになりました處、何とも御返事出來なかつたんであります。東京府の知事さんが、御前を下りましてから書面を以つて奉答致しますと云ふ事になりました。御勅語の下りました時に、御互ひに身分の高下なく各家庭に於て之を守つていかねばならぬのであります。

陛下は日々の新聞を御覽になりましたして、親を泣かせ夫を苛め、妻を苦しめるやうな悪い事をするものがある、實に残念な事であると御嘆息なさつたのであります。過ぎ去つた事は致方がないと致しまして、この後は陛下の御心を慰め、御聖旨に添ひ奉る様にしないではならないのであります。どうしても精神を作興して國民道徳を涵養し、御勅語の御趣旨を奉體して行かねばならぬのであります。

陛下の御言葉がなくとも人間として良い事をして行かねばならぬ。お互人間は何の爲に生れて來たのであらうか、着る爲か、子を育てる爲か、又長生をするのが目的か、又は食ふ爲でありませうか、萬物の靈長と云はれる者が徒らに着る事、食べる事のみでは禽獸と變らない、私共は禽獸とは大ひに違ふ所がなければならぬ。どこが違ふか、姿や形は大し

た違ひはないのであるが、その違ふ所は心であります、彼等は自分さへ都合がよければよいと云ふ、他のものはかまはぬと云ふ根性を持つて居るが、人間は人様の爲にと云ふ麗しい心を持つて居ります。禽獸の手は自分の方へ取込む事ばかりで仰向けに出來ません、遠慮會釋なくとりこみます。人間は之と違つて人様からものを戴く事も出來ます、物を讓る事も出來、又差上げる事も出來ます。是は人間の心が形に現はれて居るその證據であります。禽獸は自分さへよければいいから搔込む事が出来るやうにその力が強い、人間は自分の方に引張るよりも、向ふに押す方の力が強いと云ふ天地の理によつて人に物を讓る事が出来る様になつて居ります。讓ると云ふ事は大切なことで、之が人間の道であります。

川の水が海にはいつでも海の水が別に増さないのは是は海がよく讓る、つまり水蒸氣になつて雲や霧になり、雨となり泉となつて、やがてまた海にはいります、是は天理であります。人間はよろしく人様の爲に讓ると云ふ事が、一番大切な事であります。吉田松陰先生も『人と生れて禽獸と異なる所以を知るべし、飽食暖衣、逸樂逸居して恥ぢざる者は禽獸に等し』と云はれました。人間は世の中に於てよい事をしなかつたならば畜生よりも劣るのであります。虎は死にますればあの立派な皮を世の中に残して重寶がられます、魚類でも牛馬でも何かを残します、樹は薪となり建築材料となります。人間の死後其の肉體は何

にもなるものではなく、薪にも炭にも肥料にもなりません、ですから人間は生のある若い間によい事をしておかねばなりません、よい事をせよとお勧めになるのは是が爲であります。

よい事をしたいと云ふ心が人間にはあつて、なぜ禽獸にはないのであらうか、蓋し禽獸には恩義が判らない、恩を受けるとか、勿體ない、有難いと云ふ心がない、人は恩と云ふ事を知つてゐるのであります。世の中に親ほど有難い親切なものはないのであります、『匍へば立て、立てば歩めと、子を思ふ、我身に寄する、老を忘れて』皺は寄り、腰は弓、足許はひよろめきながらも、四五十になる子をば躓きはせぬか不調法はせぬかと、吾身の老ひを忘れて我子の事のみ心配して下さるのは親様であります。禽獸などもよく子は可愛がりますが、大きくなると寄せつけません。人間は親の御恩は有難い、天子様の御恩は尊い、何某様の御世話になつた事は忘れられぬと徹底しますれば必ず御恩を返さねばならぬ知恩報徳、感恩報謝の真心が湧出て來るのであります、この心がお互がよい事をする源で君に忠、親に孝となります。これこそ眞、善、美を備へた國民道徳で、武士道、大和魂も皆之から分かれて來たのであります。楠公父子の討死、四十七士の仇討、三勇士の働きも皆この真心であります。忠臣義士、義僕節婦、皆この心から行ひが出來たのであります。

よい事を致しましても、今此處でかう云ふ事をしておけば後から人様に賞めて頂くであらふ、あの人の爲にしておけば都合がよいと云ふ様なのは悪い事はないが偽善であります眞心から出たのでないので賞めて頂く事がなく、御褒美がないと却つて腹を立て、こんな事ぢやせぬ方がよかつたと云ふ様な人があるのですがそれでは何にもなりません。感恩報謝の眞心からしなければならぬのであります。何か目的があつてすれば目的が外れた場合には心が汚れてゆくものであります。親や天子様や近隣の方に恩を受けて居る、大阪府の人、日本國中の人、世界中の人からも尠からぬ御恩を受けて居る、この茶碗は誰が拵へて下さつたか、熱いお茶でも飲む事が出来る、さう思へばお茶碗にも恩がある、天地海山動植物、悉く恩を受けて居まして、丁度魚のやうに恩の世の中を泳いで暮らして居るのであります。何誰にも親切にお交りをして、壞れぬやうに大切に、恩を知る事が肝要であります。京都の刑務所の典獄の話に、刑務所に來る者は恩を受けることは知つて居るけれど、自分が人様の爲に働く事は一切知らぬ、之が一般の通有性であると思ひます。人間は恩を知る事がよい事をする源であると思ひます。

次にお互ひがよく考へて頂きたいのは、自分の跡を相續をさすお方をどうして教育して居られますか、學校へさへ上げておいたらそれでよいと思つてはならないのです。何故か

と云ふと學校へ行つて居る時間は五時間か八時間で、家庭へ歸へりまして、年上の人が悪い事を見せますとすぐ眞似をします、口で言つた事は仲々きくものではありません、よい事の子供等の爲にして行かねばなりません。うちの子供は頑是ないと、乳を吞ましながら夫婦喧嘩などして居りますと、子供の頭の中に蓄音機の圓盤の中に刻み込まれるやうにはいりまして、やがて立派な拵へをさして嫁にやりまして、暫くすると子供を連れて親許へ歸つて来る。子供も小さい時はよいのですが段々大きくなると挨拶も言はぬやうになり黙つて家へはいつて来る、又夜分御飯後に黙つて出て行く様になります、必ず出てゆく時には行先を告げる事、是だけは家庭では是非行はねばなりません。旦那様が出なさる時に奥様が何處へ行きなさるか尋ねますと顎で返事をなさる、それでは困ります、年上の人がよい手本を示すが大切であります。

人格の陶冶は大學より中學、小學校より幼稚園、幼稚園より二つ三つ、極端に申せば御母さんの御腹の中の教育が大切であります。御母さんは自分の子供であると思つてゐないで日本の國民である。陛下の御子であるから、子供の教育の爲に良い事をせねばならぬ子々孫々の爲に是は最も大切な事であると思ひます。又どんなに一軒の家の主人がよく働いても、家内中の人が朝寝が好きで仕事が嫌ひですと家が榮えぬと同じ事で、村會議員、

市會議員が、町や村をよくしようと思ひましても町中の人がよくしようと思ふ氣がなかつたならば、決してよくはなりません、どうしても上の人と下の人とが心を合せます事が大切であります。

以上種々の理由によつてお互がせねばならぬ、又してはならぬと云ふ事を百も承知して居りますが、どうかするとよい事をせぬばかりでなく、時々は悪い事をする。何か深い理由があるかと云ふと、理由はない、自分はしても他の人がやらぬと損な事ぢや、わしばかりでない、わしより未だ悪い事をして居る者がある、自分は別段悪い事をして居るとは氣がつかぬのであります。夜が明けた、眼が覺めた、もう起きねばならぬと思ひまして蒲團の中から隣の人を見ると未だ寝てられると、そんな事なら私はもう五分間程休まして貰はふと云ふ、眼が覺めて他の人はもう起きて夜具を片付けて居る、又もう門へ出て仕事をし居ると云ふ事になると、如何に横着な者でも起るのであります、どんな大きな頭の人お尻の重い人も起きようと思つたら起きられる、持上げ切れぬと云ふ事はありません、起きられぬのでなく起きないのであります。時間の事でも皆が勵行すれば出来るのであります。時間の勵行をされぬばかりでなく遅れたのは自分ばかりでない、自分が悪い事をしたとも氣が付きません。

よい事をするのでも数が少いと負け、数が多いと出来る、数の多い事が大切であります。一軒の家でも青年が朝起をやるのは、家の榮える本であると思ひますが、仲々永く續かない、自分だけ早く起きてつまらぬ損な事ぢやと思ふて寝てしまひます、處女會なんか行つて朝起きはいゝ事だと思つて、明日から早く起きませうと思つても、自分だけ朝起をやつても續かぬ、道連れを澤山拵へて續けて行かねば出来ないのであります。『朱に交れば赤くなる墨に交れば黒くなる』麻の中の蓬は自ら直し』であります。みんな眞直なれば眞直の中にはいつて行きます。

たゞ青年だけ娘さんだけでは、成績が上つて行かないから、又戸主だけでもいけません。談話會などある時でも、一軒の家からは一人の留守番の他は皆出て頂きたい、戸主だけ出て來ても話が徹底しません、いろ／＼話を聴きまして家へ歸つて話をする場合には半分位は忘れてゐなざる、偶々家へ歸つて話をされました、お話の上手な方でもこゝで聞いた通の話はせられぬもので、旦那さんは女や子供のせねばならぬ事だけを詳しうに丁寧云つて聞かすものであります。又女の方は婦人會などにおいでになりましたして話を聞いて歸つて、結構な話を聞いて歸りましたと云ふからどんな話かと云ふと、お酒やなんかは餘り澤山召上らぬやうにと云ふやうな事を話します。すると一體この家は誰の家だと思ふてゐる

家風に合はぬ者は今日限り出てゆけと早速始まる、婦人會に出ん方がよかつたのです。戸主だけ主婦だけ、青年だけ、處女だけ出ては一家の改善や社會の風教は出来ないのであります。時には青年の方が寄合つて撃劍をしたり、處女の方が御寄りになつて料理の講習や主婦の方が寄つて家計の話をする事も大切であります、會合の場合は一軒の家からは留守番の他は全部出て頂けば、男も女も、せねばならぬ事はお互が、聞いて居ますから嘘は言はれません。一人の人が家へ歸つて話をぼち／＼せられますと、そんな話であつた、こんな話もあつたと云つて話が出て來ます。

若し戸主一人だけ出席なされると、旦那さんが話をなさつて子供さんが聞きます、ちぎれ／＼の話で又叱言が始まつた位に思ひなざる、中には嘘も交せて、自分勝手な事を云ふ人があります、男一人女一人、お互に嘘も云はれず保證になつて手を取合つてよい事をした方を眞似てゆく。人間は一人の力は弱い、殊に女一人男一人力を合せてやれば二倍三倍ではない非常なものであります。他の會と違ひまして報徳會は老若男女一緒に集つて頂きます、男ばかりが寄りますと男の都合のよい事を圖りやすく、青年は青年、處女は處女、軍人は軍人で寄つて居りましたら、忠孝の話をして、國旗を揚げる話をして中々實行されません、一軒から代表でおいでた方があるかも知れませんが實行同題の話でも家へ歸

つての話は難しいものであります。男は男、女は女、金持は金持と、同じ種類のものが都合と自分等の都合のよい事許り話をする。金の利子を上げようぢやないかとか、又米もとれないのだから小作米を負けて貰はう、一層出さん事にしたらと云ふ風に勝手な話を話します。

報徳會は種々の人が寄る、鼻の高い人も低い人も、金持も貧乏人も、氣の長い人も短い人もあります、その中で自分勝手な事は云はれません、互に譲り合はねばなりません、金持は貧乏人に、學問のある人はない人に、と云ふ様に互に譲合つて行けば圓滿に行きます皆様御承知の通りこの會は會長を置かない、名譽會員、特別會員もない、他の會はお金さへ出せば、名譽會員か何かにして下さるのであります。是の會は道徳の會合でありますから卒業したものは一人もない、未成品ばかりで人間らしいものはない、立派な着物を着たりお金が出来ただけで人格が調はなかつたら未成品であります、それで報徳會は平等自然に差別が出来てゆくのであります。御殿様も御風呂に召される時は裸です、殿様と云ふものは昔は威張つたもので、下にくと云つて御風呂に召されるにも大名であるから是にて御免と云つて御風呂へ着物を着てははいられません、それでは垢が落ちません。報徳の風呂にはいつて物識學者も、金持もさう云ふ肩書を除つて手の届かぬ心の奥の垢迄とれて有

難うくと感謝の念を持たねばならぬのであります。

『殿様も屈んではいる蚊帳の内』殿様は頭を下げたり腰を屈めぬ方であり、何を云ふにも只反返つてよし／＼位の方であります、蚊帳の中にお這入りなされる時には殿様であるから是にて御免と云つて反り返つて蚊帳の中へ這入つて居れば、蚊が一ぱいはいつて來て大騒ぎであります、殿様でも頭を下げ腰を屈めて、蚊帳にはいられます。お互に時々愚痴をこぼしますが、この報徳會と云ふ蚊帳の中に這入つて、修養をさして頂いて居れば一代安樂な世渡りが出來ます。

次に實行問題を協議するにしても、この問題を一つづゝ幾つもと云ふとつひ虻蜂とらずで、一つづゝ相談してどうして之をやつて行きませうかと云つて遠慮なしに意見を述べまして、その次の會合迄に皆さんがやつてゆくのであります、それが一番大切の事であり、第一君が代の合唱、御勅語の捧讀、次には實行問題、禮に始まつて禮に終ります目には見えなくても 陛下がおいでのなると思つて、謹んで最敬禮をするのであります御勅語は何誰が御捧讀になりましたも私一人に只今陛下より下し給はつたと思つて、謹んで承らねばならぬのであります、御名御璽で終りましたならば、もう一遍丁寧な御辭儀をする、是が作法であります。

口で君が代を唱へ耳で御勅語を聴きますと、本氣になり、眞面目になり、何はさておいて實行問題を協議するのであります。講話も必要であります、お互の心はすぐに曇り勝になり、垢が溜ります、又先輩名士から新しい事を聴いて、人様の善行美談を聞く事も大切であります。時には厭な話を聞いて頂かねばならぬ事もあります、耳障のよい話ばかりを聞かうと思つてゐますが『鼻向けのならぬ肥しも汲取りて瘦せたる畑の肥料とはせむ』と云ふ歌のやうに、米や麥が採れるやうに、厭な話も自分の瘦せた腹の中にかけると修養になるのであります。御話はする人よりも聞く人が大切であります、勿論是は聞き方が耳で聞くばかりでなく心でよく話を聞かねばならぬのであります。報徳會は實行を重んずるお互の精神修養でありますから、早や五年間、六年目になつてお聞きになつて居るのであります、毎月十日に定つて居りますから、何はさておいて、修養の爲め出で頂かねばなりません。

『玉は磨かすば光りなく、鐵は冷めざる中に鍛たねばなりません』鐵などは相打に打合せませぬと本格な形は出来ません。お互の心は炭團ではなく磨けば美しくなりますから、決して修養を忘つてはなりません、身體や形はお互が養ふ事によく氣を付けます、顔を洗ひ時々はお風呂に召されるから貴方々のやうな顔付をして居られます。又三度々御飯を

召上り、お酒や御菓子などを召上つて、立派な體格をして居られますが、それが三月目に一遍御飯を食べさせたらどうでせうか、心の食物は口から入れずに目や耳から入れて手足によい事をさせればお互の心がよくなり、顔付がよくなり、歩きぶり迄がよくなります。只今は心に食物を食べさして居られるので顔付がよくなつて居られます。一ヶ月に一度位はせめて寄合つて心に食物を興へたいと云ふのが報徳會であります。

毎月々は數が多過ぎる、三月目か四月目に一遍でよからう、朝起をするのも慣れる迄は目が可哀さうであるからと三日目になり五日目になり十日、三十日となつても朝起せん方が尙よからふと云ふ事になります、報徳會も毎月々々出席せんでもよからうと云つて居ると、ほつとく會になつてしまいます。報徳會の實行問題の中にも色々ありますが朝起きたならば神佛様に御挨拶を申し、皇居の方に向つて遙拜する、禮拜をしたならば時々は御勅語を齊唱致します。家内中が御捧讀をして行かねばならぬのであります。時間のかゝる事ではないから齊唱をします、それから家内中の人は御早う御座います、と御挨拶を致します、何處も挨拶をして居られませんかから人並だと云ひますが、それは人並でなく畜生並であります、畜生は御挨拶は致しません。

私共は顔を見た事もない、名を聞いた事もない人からも恩を受けて居ります、遠い親類

より近い隣近處で大變恩になつて居るのであります。親子兄妹夫婦であるから、お早う、よいお天気だと云つても頭もどこも減りはしません、頭だけは節約せずに下げるのであります。仰向けにしたり横に傾けたりと云ふのではない、自然に前に下がるのであります。挨拶などは他人がましい、外々しいと云ふ人があります、『親しき中にも禮儀あり』又『夫婦別あり』で御辭儀と云ふものは一軒の家から始めていかねばならぬので、是がないと喧嘩が初まるのであります、之からお前と喧嘩をしようかと云つて御辭儀をする人はない。頭を下げないから喧嘩になつて、近所や親許から人が来て三遍も五遍も御辭儀をせねばならぬ事になります。まあどちらかと云へば女の方から御辭儀をなさる、時々男の方からでもよろしい、今日は大變よいお天気になりましたと、男の方から御辭儀をなさると、女の方がびつくりして遅れまして……と云つて奥さんがにこ／＼なさるのであります。

男の方は金儲けが上手でありましたも裁縫や、洗濯は月に一遍でも出来ませんから男の方から、お前の御蔭で立派な息子が生まれまして、御苦勞様でありましたと云つて御辭儀をすれば、是は私一人の子供では御座いません、旦那様の御威光で御座いますと、かうすれば一軒の家は晴れて暮しが出来て行くのであります。

『笑ふ門には福來る』時々人間は我身勝手なもので俺なればこそ、私なればこそと云

ふ已惚があつて是だけ働けば俺は、私ならこそ貧乏世帯を是だけにと云ふ、このこそは貴方ならこそ、私のやうなものをと人に付けるので、かうして讓合つてゆきますから『こそ／＼の、こそはこちらの、こそならで、こそはあちらの、こそにこそあれ』一寸の事で圓滿にゆく僅かな事であります、こんな事は皆様御承知の事ではありますが是非實行して頂きたいと思ふのであります。かう云ふ風に報徳會では一つ宛よい事をして行けば漸次よい人間になると共に一方には心持よく暮す事が出来ますから、能率も上り仕事にも便利で、家業も繁榮しますから、物質と精神がともに進みまして安樂に幸福な世渡りが出来ると思ひます。大分時間がかかりましたから之で御免を蒙ります。

(昭和八年六月十日講話)

## 決議事項

- 一 約束の時間を違へぬやうに致しませう
- 二 履物を行儀よく脱ぎ揃へませう
- 三 祝祭日には必らず国旗を掲揚する事に致しませう
- 四 食事の時小言を言はず、心から感謝して頂きませう
- 五 高貴の御方様の御宮眞のある新聞雑誌を大切に取扱ひませう
- 六 家の内外を綺麗に掃除し清潔に致しませう
- 七 外出の際は行先きを家人に知らしておくことに致しませう
- 八 煙草の吸殻、火鉢、炬燵等火の氣一切に注意して過ちのない様に致しませう

- 九 戸、障子、襖の明け締めを正しく丁寧に致しませう
- 一〇 他人の勞苦に對し感謝の意を表しませう
- 一一 お米や御飯は一粒でも大切に致しませう
- 一二 使つた品物は乾度もとの場所に納シヤひませう
- 一三 言葉遣ひを親切丁寧に致しませう
- 一四 上水を無駄使ひせぬ様に致しませう
- 一五 なるべく夜ふかしをせぬ様に致しませう
- 一六 何品でも無駄にならぬ様、買ふ時使ふ時注意する様に致しませう
- 一七 瓦斯、電熱、炭、薪を無駄に使はぬ様に致しませう
- 一八 樹木、花卉を愛護いたしませう
- 一九 報徳會の行事の役割はお互に進んで務める様に致しませう

- 二〇 年末、年始、中元、其他の贈答品をなるべく質素に致しませう
- 二一 清き一票を必ず汚さぬ様に致しませう
- 二二 何方にも氣持よく返事をする様に致しませう
- 二三 汽車、電車の切符を買ふ時、成るべく釣銭のいらぬ様に用意致しませう
- 二四 毎朝皇居を遙拜し神佛を禮拜致しませう
- 二五 成るべく國産品を愛用致しませう
- 二六 風呂の湯を汚さぬやうに注意致しませう
- 二七 食事の時箸をつけたる物は成るべく残さぬ様に致しませう
- 二八 訪問の際用件のすみたる後は、成るべく長居せぬ様に致しませう
- 二九 痰唾を吐き散さぬ様に致しませう
- 三〇 果物の皮、辨當の殻、煙草の吸殻等を處かま

- わづ捨てぬ様に致しませう
- 三一 來客には飲食を無理に強ひぬやう、又訪問者は酒食の程度を過さぬ様に致しませう
- 三二 他人の善行はつとめて稱揚し、陰口はみだりに言はぬ様に致しませう
- 三三 空地に塵埃を捨てぬやうに致しませう
- 三四 便所の手拭は常に清潔にして置く様に注意致しませう
- 三五 時計を正確にあわせる様に注意致しませう
- 三六 食事は家内中なるべく揃ふて致しませう
- 三七 裁縫のアト後には縫針の始末に注意致しませう
- 三八 食器を清潔に致しませう
- 三九 寝冷えせぬ様、させぬ様に致しませう
- 四〇 毎晩ねる前にうがひをする様に致しませう
- 四一 眞剣に儉約致しませう



- 四二 腹を立てさせぬ様、成るべく腹を立てぬ様に致しませう
- 四三 之までの決議事項を省みて尙一層實行する様に注意致しませう
- 四四 朝夕の挨拶をする様に致しませう
- 四五 神社、佛閣の前を通行の節は禮拜を忘れぬ様に致しませう
- 四六 雑誌報徳を毎月必ず讀みませう
- 四七 挨拶は先きにするやう致しませう
- 四八 道や家を尋ねられたら丁寧親切に教へませう
- 四九 仕損じた事はすぐにお詫び致しませう
- 五〇 仕事は眞面目に致しませう
- 五一 表札には必ず姓と名と、町名番地をハッキリと書いて置きませう
- 五二 食事はよく咀嚼して戴きませう

- 五三 郵便物の宛名と、差出人の住所番地、姓名はハッキリ書く様に致しませう
- 五四 軍旗に對する敬禮を必ず嚴肅に致しませう
- 五五 お互になるべく奉仕貯金をする様致しませう
- 五六 借りた傘は速にお返しする事に致しませう
- 五七 凡ての會合には會の行事の終るまで退場せぬ様に致しませう
- 五八 帝國の經濟孤立に處し、お互の家庭生活に大覺悟の用意をして置きませう
- 五九 之までの決議事項を省みて尙一層實行する様に注意致しませう
- 六〇 交通規則を嚴重に守りませう

### 帝塚山報徳會

發行兼 編輯人 大阪市住吉區住吉町一〇一五番地 蒲田政治郎

終

(非賣品)